仙台市文化財調査報告書第370集

若宮前遺跡

2010年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第370集

若宮前遺跡

2010年3月

仙台市教育委員会

七北田川から若宮前遺跡を望む　　平成22年1月撮影

塚状遺構から南方の平場方面を望む

中世陶器と宋銭

近世・近代の陶磁器

若宮前遺跡付近空中写真(○印が若宮前遺跡)　国土地理院撮影空中写真(昭和36年)

「野初絵図」（近世）「明神」・「天王」が若宮前遺跡付近　　宮城県図書館蔵

「奥州名所図会」（近世）　岩切城・東光寺・志波彦神社
「志波彦神社」付近が若宮前遺跡　　財団法人斎藤報恩会蔵

序　　文

日頃から仙台市の文化財保護行政に関しまして、多大なるご理解とご協力を賜り、厚く感謝申し上げます。

本市の東北部に位置する岩切地区は、かつては豊かな田園地帯でしたが、昭和40年代頃から開発が進み、今なおＪＲ東北本線岩切駅周辺などでは都市化が進んでいるところであります。若宮前遺跡はこの地区に所在しており、昭和50年に宅地開発が計画されたため発掘調査を実施いたしました。

丘陵南縁部に立地している若宮前遺跡は、岩切城跡や東光寺遺跡を西側の背後に控え、東側の平野部には洞ノ口・鴻ノ巣・山王・新田の各遺跡、そして多賀城跡と、古墳時代・古代・中世の遺跡が密に分布している地域にあります。このように各時代にわたり人々の生活が営まれており、とりわけ中世の岩切地区は、奥大道と冠川(七北田川)が交差する水陸交通の要衝でありました。これらを背景に町場ができ、定期市が開かれるなど、賑わいをみせていたようです。

調査の結果、丘陵の南縁部において古代・中世のみならず、縄文時代から現代まで、連綿と人々の暮らしが続いていたことがわかりました。とりわけ、中世の建物跡、塚状遺構、近世墓群などがみつかり、その東側に広がる平野部とは異なる世界を垣間見せてくれる発見となりました。

このように、本市には私たちの祖先が創造し、守り伝えてきた貴重な歴史的遺産が数多くあります。これらを永く後世に継承していくことは、現在の私たちの責務であります。そして、これらの歴史的な遺産を活かしながら、皆様と街づくりに取り組んで参りたいと考えております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行まで多くの年月を要したことをお詫び致しますとともに、発掘調査や報告書作成にあたりご指導とご協力をいただきました皆様に深く感謝申し上げます。また、埋蔵文化財の保護につきましてご理解とご助力を賜りました地権者の皆様に心から御礼申し上げます。

平成22年３月

仙台市教育委員会
教育長　荒　井　　崇

例　　言

1　本書は、宅地造成計画の事前協議に基づいて、仙台市教育委員会が実施した宮城野区岩切所在の若宮前遺跡発掘調査の報告書である。

2　本書の執筆・編集は、仙台市文化財課調査係の担当職員の協議のもとに、田中則和・原河英二が行い、出土遺物写真の撮影については、佐伯修一が行った。

3　中世陶器および近世・近代陶磁器の製作年代・産地などについて、文化財課田中則和・佐藤洋が確認を行い、同課主濱光朗から実測図などについて助言を得た。

4　出土した石器の石材などについては、仙台市科学館齋藤弘明指導主事・西城光洋指導主事の教示による。

5　発掘調査及び報告書の作成にあたり、次の方々及び関係機関から多大な指導と助言をいただいた。記して感謝の意を表したい（敬称略・五十音順）。

飯村均（財団法人福島県文化振興事業団）　岡根達人（弘前大学）　藤沼邦彦（弘前大学名誉教授）

三辻利一（大阪大谷大学）　吉岡康暢　仙台市科学館　仙台市博物館

6　三辻利一氏には中世陶器の胎土分析をお願いし、「若宮前遺跡出土および湾ノ巣遺跡表面採集の中世陶器の蛍光X線分析」というテーマで論考をご寄稿いただいた。

凡　　例

1　本書で使用した土色は、「標準土色帖」のマンセル標記とともに和名を併記した。

2　本書中の第2図・3図は仙台市科学館発行の「仙台市地形区分図」(1985)、第4図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図「仙台東北部」、第5図は仙台市教育委員会発行の「仙台市文化財分布地図」(1983) をそれぞれ使用した。

3　本書に使用した図版には全て方位と縮尺を記載した。図中での方位は磁北である。

4　断面図の標高値は海抜高度を示している。

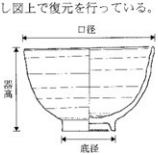
5　遺構は種別ごとに次の記号を使用した。

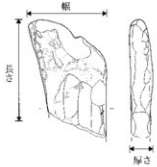
SB：掘立柱建物跡　　SD：溝跡　　SM：塚　　SK：土坑　　P：ピット　　SX：その他の遺構

6　遺物観察表で、陶磁器類の技法についてすべてがロクロ成形であるために、あえて記載は行わなかった。法量の単位はcm及びgである。石器の幅・長さは最大値である。（　）付き数字は、残存値を示している。

9　掲載遺物の実測図の縮尺は、破片資料が多いため、原則として1/2とした。遺物写真の縮尺についても、1/2を基本とした。古銭は原寸で表示した。

10　遺物の実測図は、外形線・中心線・稜線を実線、推定線を破線、釉薬の境を一点鎖線でそれぞれ表示した。中心線が一点鎖線のものは、展開し図上で復元を行っている。





7　本遺跡の調査成果については、すでに現地説明会資料・仙台市文化財パンフレット・仙台市史などに内容の一部が紹介されているが、本書の記載内容がそれらに優先する。

8　本書に係わる資料については、仙台市教育委員会が保管している。

目　　次

序　　文　i
例　　言　ii
凡　　例　ii
目　　次　iii
挿図目次　iii
写真図版目次　iv

第１章　調査概要……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査要項……1
第２章　遺跡の位置と環境……2
第１節　地形的環境……2
　第２節　歴史的環境……4
第３章　調査の方法……6
第４章　遺構と遺物……8
　第１節　基本層序……8
　第２節　遺構と出土遺物……8
　　Ⅰ　Ａ区の遺構と遺物……9
　　〔建物跡〕
　　ＳＢ１掘立柱建物跡……9
　　〔溝　跡〕
　　ＳＤ１溝跡……9
　　ＳＤ２溝跡……9
　　〔その他の遺構〕
　　ＳＸ１その他の遺構……9
　　ＳＸ２その他の遺構……9
　　２　Ｂ区の遺構と遺物……12
　　〔塚状遺構〕
　　ＳＭ１塚状遺構……12
　　〔土　坑〕
　　ＳＫ１土坑……16
　　３　Ｃ区の遺構と遺物……21
　　〔溝　跡〕
　　ＳＤ１溝跡……21
　　ＳＤ２溝跡……21
　　ＳＤ３溝跡……21
　　〔土　坑〕
　　ＳＫ１土坑……21
　　ＳＫ２土坑……21
　　ＳＫ３土坑……21
　　ＳＫ４土坑……22
　　ＳＫ５土坑……22
　　○若宮前遺跡出土陶器について……25
　　○堀ノ巣遺跡の表面採集資料について……26
第５章　自然科学分析……28
第６章　まとめ……36
　＜引用・参考文献＞……37
　写真図版……39
　報告書抄録

挿図目次

第１図　若宮前遺跡の位置……2
第２図　地形区「仙台市地形区分図」……2
第３図　七北田川中・下流域の地形区分図……3
第４図　若宮前遺跡と周辺の遺跡……5
第５図　調査区位置図……6
第６図　Ａ区・Ｂ区発掘調査区……7
第７図　Ｂ区・Ｃ区発掘調査区……7
第８図　Ａ区基本層序模式図……8
第９図　Ｂ区基本層模式図……8
第10図　Ｃ区基本層模式図……8
第11図　Ａ区遺構平面図……10
第12図　Ａ区出土遺物……11
第13図　Ｂ区遺構平面図……13
第14図　４Ａ区北東壁断面図……14
第15図　Ｂ区塚状遺構（Ａ－Ｄ´）断面図……14
第16図　Ｂ区塚状遺構（Ｅ－Ｅ´）断面図……15
第17図　Ｂ区ＳＫ１土坑平面図・断面図……16
第18図　Ｂ区出土遺物（１）……17

第19図　B区出土遺物（2）……18
第20図　B区出土遺物（3）……19
第21図　B区出土遺物（4）……20
第22図　C区遺構平面図……22
第23図　C区ＳＫ１土坑平面図・断面図……23
第24図　C区ＳＫ２土坑平面図・断面図……23
第25図　C区ＳＫ３土坑平面図・断面図……23
第26図　C区出土遺物（1）……24
第27図　C区出土遺物（2）……25
第28図　湯ノ果遺跡表面採集資料（1）……26
第29図　湯ノ果遺跡表面採集資料（2）……27

写真図版目次

図版1　A区・B区遺構検出状況……41
A区大溝及び掘立柱建物跡検出状況
B区塚状遺構検出状況
図版2　B区・C区遺構検出状況ほか……42
B区塚状遺構
B区ＳＫ１土坑検出状況
B区ＳＫ１土坑調査状況
B区ＳＫ１完掘状況
B区遠景（C区からB区を望む）
C区遠景（B区からC区を望む）
図版3　A区・B区出土遺物……43
図版4　B区出土遺物……44
図版5　B・C区出土遺物……45
図版5　C区出土遺物……46
図版6　湯ノ果遺跡の表面採集遺物……47

第1章　調査概要

第1節　調査に至る経緯

昭和50年7月30日付け、仙台市岩切字若宮前11番地他における宅地造成計画の事前協議願（整理番号50－4）が、事業主体者から、仙台市開発局建築部に提出された。同日、建築部から協議願が仙台市教育委員会社会教育課（以下「市教育委員会」という。）に送付された。

これを受けて、市教育委員会は、開発予定区域が周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、その性格と範囲の確認を目的として、昭和50年9月16日から9月26日まで9日間、297㎡について確認調査を実施した。開発予定区域に、南側からA～C区の調査区（第5図）を設定し調査を行い、その結果、A区では古代以降の掘立柱建物跡1棟、B区では時代不明の塚状遺構1基、C区では近世の土坑墓2基などが確認された。

この調査結果により、市教育委員会は、埋蔵文化財の保存について事業主体者と協議を行った。遺構の存在が確認された区域への対応について、数回の協議を経て、開発に先立つ発掘調査について検討することとした。昭和50年11月19日付け、事業主体者から発掘調査実施依頼書が提出され、市教育委員会は、本発掘調査を行う運びとなった。

市教育委員会は、昭和50年12月1日から12月28日まで、26日間、480㎡について本発掘調査を実施した。また、翌年1月には発掘調査の成果を一般公開するため「若宮前遺跡発掘調査説明会」を行った。そして、昭和51年4月5日付けで、事前協議に関する遺跡の発掘調査と記録保存作業が終了した旨を事業主体者へ通知した。

なお、当該遺跡の遺跡名称については、「入山館跡」（宮城県遺跡地名表登録番号01248）として登録していたが、確認調査の結果を受けて、「若宮前遺跡」に変更した。

第2節　発掘調査要項

1	遺跡名	若宮前遺跡
2	遺跡記号	宮城県遺跡地名表登録番号01248
		仙台市文化財分布地図登録番号C－522
3	所在	仙台市宮城野区岩切字若宮前11他
4	調査面積	確認調査　297㎡
		本発掘調査　480㎡
5	調査期間	確認調査　昭和50年9月16日～9月26日（9日間）
		本発掘調査　昭和50年12月1日～12月28日（26日間）
6	調査担当	仙台市教育委員会社会教育課文化財係
7	調査体制	確認調査　田中則和　今野　章
		本発掘調査　調査員　岩淵康治　田中則和
		調査補助員　今野　章　斉藤秀寿
8	調査参加者	石本　弘　滝口　卓
9	調査協力	八坂神社宮司 佐山輝明　八坂神社代表役員 伊藤政吉　㈲丸金建設 金子與之助

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地形的環境

１　位置

若宮前遺跡は、仙台市宮城野区字若宮前11ほか地内に所在する。仙台市は宮城県の中央に位置し、本遺跡はその東北部に所在する。JR仙台駅のある中心部から北東に7.5kmの地点である。

２　河川と地形

七北田川は標高1172mの泉ヶ岳を上流端とし、奥羽山系から東に延びる富谷・七北田丘陵を開析しながら東流し、蒲生付近で太平洋に注ぐ。流路長は約40kmで、広瀬川・名取川と同程度であるが、流域面積は230平方kmで2河川より狭い（文献13）。中流域には河岸段丘の発達がみられ、下流部の平野部では両岸に自然堤防や後背湿地などの形成がみられる。

流路は、上流部では長谷倉川と合流した後、根白石付近まで南流する。実沢付近で流路を東に変え、市名坂付近まで大きく蛇行を繰り返しながら流下している。中流域では両岸に台原段丘・上町段丘・中町段丘・下町段丘の各河岸段丘が形成されており、長谷倉川では高野原・西脇付近から下流、中流域では根白石・実沢・松森付近において、左岸側で段丘の発達が顕著である。松森付近から河川沿いに沖積地がみられるようになり、岩切付近から低湿地帯である仙台平野に流出する。この後次第に南流し、高砂付近から再び東流し蒲生へ向かう。なお、下流部の流路については、寛文10年（1670）に湊浜方面から蒲生方面に付け替えを行っているが、自然堤防の発達の状態から、それ以前にも蒲生方面への河道が存在していたと考えられる（文献26）。

若宮前遺跡は、西側に岩切城跡や東光寺遺跡があり、東光寺遺跡と同様、富谷丘陵の逆三角形状を呈する南端が七北田川と接する地点に位置する。東光寺遺跡とは、岩切城に登る旧道に沿う南北方向の谷によって隔てられた小独立丘陵上に立地している。丘陵直下の周辺宅地との比高差は約20mほどである。また、遺跡の東側には北東から南西に延びる長町－利府線（活断層）が延びており、七北田川はこれを横切るように低湿地帯に流出し、自然堤防などを形成する。自然堤防上では古代から現代まで集落が営まれている。

３　周辺の地質

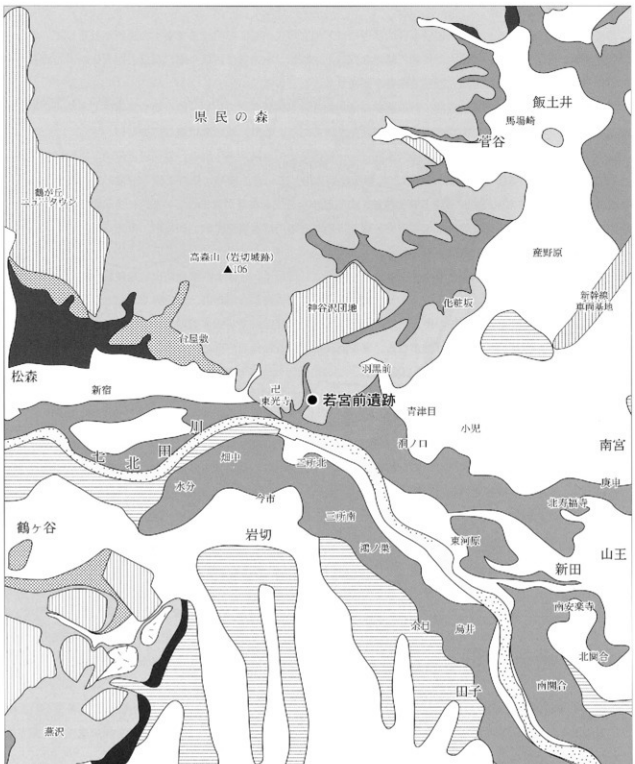
富谷丘陵は、砂岩（泥岩及び酸性凝灰岩を伴う）よりなる中新世後期－鮮新世前期の七北田層からなる。富谷丘陵の南西端にはシルト岩・砂岩及び酸性凝灰岩よりなる低位段丘下段（仙台中町段丘）がみられ、鮮新世の亀岡層・竜の口層などからなる。またその西側に形成された最低位段丘（仙台下町段丘）は、礫・砂及び泥よりなる。第四紀更新世―完新世の段丘堆積物である。また平野部は礫・砂及び泥よりなる完新世の沖積層である（文献13）。

このように七北田川中流域の地質は、いずれの層も凝灰岩・シルト岩・砂岩が主体である。若宮前遺跡付近は、主に砂岩からなっており、石窟や横穴墓を造り易い地質構造であることが窺える（文献6）。

第１図　若宮前遺跡の位置

第２図　地形区

「仙台市地形区分図」1995.3　仙台市科学館



「仙台市地形区分図」１：25000（1985.3　仙台市科学館）を基に作成

低平丘陵
最低位段丘（仙台下町段丘）
不明瞭な自然堤防
中位段丘（台の原段丘）
平野（後背湿地）
河原
低位段丘上段（仙台上町段丘）
自然堤防
人工平坦地

第３図　七北田川中・下流域の地形区分図

第２節　歴史的環境

若宮前遺跡の位置する七北田川流域の岩切付近には、縄文時代から江戸時代まで多くの遺跡が分布している。この七北田川が形成した自然堤防上に集落、低平な丘陵上に城館、その麓に古墳や横穴墓などが営まれ、これらの遺跡の分布状況などからこの地域の歴史的環境を概観することとする。

縄文時代の遺跡は、岩切畑中遺跡・新田遺跡のほか数遺跡が確認されている。散布地や集落跡である。弥生時代は、山王遺跡・鴻ノ巣遺跡で集落跡や水田跡が発見されている。ともに遺跡数は概して少ない。

古墳時代になると、集落跡・古墳・横穴墓など、比較的多くの遺跡がみられる。岩切付近の向洋に洞ノ口遺跡、岩切畑中遺跡、山王遺跡、八幡崎B遺跡などの集落跡が立地している。種列と掘跡を伴う中期の大集落である鴻ノ巣遺跡（文献10）、この下流に位置する新田遺跡、山王遺跡などでも集落が営まれていた。一方、集落の北西方向の丘陵やその麓には、千人塚古墳・法印塚古墳・塚元古墳などの円墳が築造され、入生沢・東光寺・北沢・菅谷・菅谷薬師神社・南馬場崎と横穴墓群がみられる。

奈良・平安時代になると、居住域や生産域はさらに拡大していく。丘陵や自然堤防上に遺跡数の増加がみられ、洞ノ口・岩切畑中・鴻ノ巣・新田・山王・今市の各遺跡から、大規模な集落跡、水田跡などが発見されている。

奈良時代の前半に、若宮前遺跡の東方約3.5kmの丘陵上に、陸奥国府である多賀城が創建される。多賀城の国府としての機能は次の平安時代にも受け継がれる。平安時代には多賀城南面一帯に南北大路と東西大路を機軸とした方格地割りが施行され、都市が形成される（文献31）。この地割内に位置する山王遺跡では、国司や官人の館と推定される遺構が検出されている（文献29）。10世紀中頃以降、多賀城が政治的な機能を失うと、周辺の集落も廃れていき、荒地や湿地と化したようである。

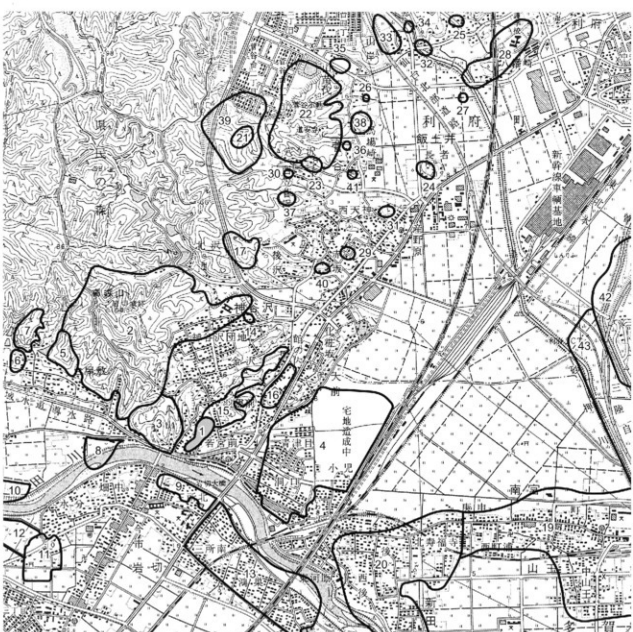
中世の遺構については、七北田川（冠川）両岸の自然堤防上で屋敷跡が調査されている。洞ノ口遺跡、新田遺跡、山王遺跡、八幡遺跡で検出され、なかでも新田遺跡では、大溝を巡らせた大規模な武士の屋敷跡と周辺の小規模な屋敷跡がまとまって遺存していた（文献23）。また、丘陵などには岩切城・東光寺城・化粧坂城・菅谷館などの城館が築造され、この麓には東光寺や志波彦神社などの寺社が建立されている。そして、周辺には東光寺石窟仏群や六薬師磨崖仏が穿たれ、地蔵堂・東光寺・洞ノ口・羽黒前・岩切三所北A・Bの各板碑群が造立されている。

城館のなかで、岩切城跡は、全国的な内乱であった観応の擾乱に際して、観応2年（1351）に足利直義方の奥州管領吉良定家がもう一方の管領で足利尊氏方の畠山国氏とこれに属した留守氏を攻め落とした地として知られる。その後、室町時代には留守氏がこの地域を掌握し、岩切城を居城とした。この付近はその支配下である「高用名」・「南宮庄」に含まれるとされ、発見された屋敷跡は家臣団の居館と想定されている。また、七北田川中流域では、冠屋市場、河原宿五日市場の二つの定期市が営まれ、「奥大道」・「おくのほそ道」と呼ばれる道筋でもあり、要衝の地となっていた。

永禄13年（1570）に、留守氏が岩切城から利府城へ移ると、家臣団の多くが共にこの地を去ったと考えられ、中世の末になると賑わいの場が今市に移る。そして、戦国時代には、留守氏は新たに台頭してきた伊達氏の支配下に置かれていくことになる。

近世には丘陵麓から自然堤防上に洞ノ口遺跡・岩切畑中遺跡・山王遺跡で集落跡、若宮前遺跡で墓坑群などが確認されている。慶長年間（1596～1615）に、今市に新町が設けられ、足軽町となった。仙台藩は17世紀後半になると、藩財政の再建策として海上交通網の整備と新田開発に力を注ぐ。この一環として七北田川の整備があり、水害防止と年貢米の輸送のため、寛文10年（1670）に、砂押川を流路とする湊浜方面から蒲生方面に河道を付け替えたとされている。七北田川中流域は、河川や用水堰の整備と開墾政策により荒蕪地から耕地への転換が図られ、穀倉地帯として栄観していく。

現在の集落は、岩切から多賀城跡にかけて、今市・新田・南宮・山王と、東西に長い自然堤防上に立地しており、その南北の両側にある湿地帯には水田が広がっている。



番号	遺跡名	立地	種別	時代	地目	番号	遺跡名	立地	種別	時代	地目
1	若宮前遺跡	丘陵斜面	遺物散布、掘立遺構	奈良～近世	宅地	23	六実坪横穴墓	丘陵縁	横穴墓	中世？	山林・神社境内
2	若宮横穴墓	丘陵	横穴墓	中世	山林、公園		六実坪横穴墓群			古代～中世	
3	若宮古墳群	丘陵斜面	横穴墓、古墳	古墳	山林、宅地、畑	24	伊豆形比塚遺跡	丘陵	祭祀	平安	宅地
4	多賀Ⅰ遺跡	自然堤防	集落、掘立柱建物、竪穴住居	古墳～近世	宅地、畑	25	向山遺跡	丘陵縁	集落	縄文・古代	畑・水田
5	台畑横穴墓群	丘陵斜面	横穴墓	古墳	山林	26	伊豆形古墳	丘陵縁	墳墓	古墳	水田
6	入生沢遺跡	自然堤防	集落跡	平安	畑	27	八幡寺古墳群	丘陵縁	墳墓	古代	水田
7	入生沢横穴墓群	丘陵斜面	横穴墓	古墳	山林	28	八幡寺Ⅱ遺跡	丘陵	集落	縄文～平安	神・果樹園
8	動坂遺跡群	自然堤防	集落跡	平安	畑	29	内大神遺跡	丘陵縁	散布地	古代	畑
9	今宮遺跡	自然堤防	集落跡、包含地	平安、中世	宅地、畑	30	六ヶ沢遺跡	丘陵縁	散布地	古代	畑・果樹園
10	入生沢遺跡	自然堤防	集落跡	平安	畑	31	新平屋遺跡	丘陵縁	散布地	古墳？平安	畑
11	熊神遺跡	自然堤防	城館跡	中世	宅地、畑、水田	32	出口遺跡	丘陵縁	散布地	古代	畑
12	万石浦Ⅳ遺跡	自然堤防	集落跡、包含地	縄文～近世	畑、水田	33	山沢遺跡	丘陵縁	散布地	古代	畑
13	海ノ目遺跡	自然堤防	集落跡、掘立柱建物	弥生～中世	畑、果樹	34	入沢窯跡群	丘陵縁	散布地	古代	畑
14	南沢遺跡	丘陵	包含地	縄文～古代	畑	35	山崎北遺跡	丘陵縁	散布地	古代	畑
15	台畑遺跡群	丘陵	散布地、横穴墓	古墳、近世	山林	36	山崎遺跡	丘陵縁	散布地	古代	畑
16	化粧地遺跡群	丘陵	散布地	平安	宅地、畑	37	笠谷山遺跡	丘陵縁	散布地	古代	畑
17	北前遺跡群	丘陵	横穴墓	古墳	山林	38	北前新前遺跡	丘陵縁	散布地	古代	畑
18	八坂寺遺跡	自然堤防	寺院	古代末～中世	畑	39	東大神遺跡	丘陵	散布地	古代	宅地跡
19	山王遺跡	自然堤防	集落、都市遺跡、官衙	弥生～近世	畑、水田、宅地	40	屋敷山遺	丘陵	円墳	古墳	山林
20	前山遺跡	自然堤防	包含地	縄文～中世	宅地、畑、水田	41	熊神Ⅱ遺跡	丘陵頂部	散布地	古代	畑・宅地
21	若宮横穴（竹林山横穴）	丘陵	横穴墓	平安～中世	山林、墓地	42	多賀遺跡	台地～平野	集落、都市	古墳～平安	畑・宅地・水田
22	若宮前Ⅱ遺跡（横穴墓、若宮横穴古墳）	丘陵	横穴墓	古墳後	山林、公園内	43	市川横道跡	台地～段丘	集落・都市	縄文～平安	宅地・水田
		丘陵	横穴墓	古墳後	山林	44	仁人塚古墳	丘陵頂部	円墳	古墳	畑

第４図　若宮前遺跡と周辺の遺跡

第３章　調査の方法

１　調査区の設定

若宮前遺跡発掘調査の対象地区（宅地造成予定地）は、小独立丘陵上に位置している。その丘陵上の南西部の6×15mほどの平場が存在している部分をＡ区、この丘陵のほぼ中央である塚状を呈している部分をＢ区、丘陵の北東部の緩く傾斜する平場の部分をＣ区とした（第5図）。遺跡の性格と範囲を確認するため、丘陵全域を調査対象とし、3×3m単位のグリッドを設定し、Ａ区が27㎡、Ｂ区が180㎡、Ｃ区が81㎡、その他が9㎡、計297㎡の調査区を設定した。

確認調査の結果、Ａ区ではピット（柱穴）が、Ｂ区では頂部に平場をもつ高まりと土坑が、Ｃ区では土坑群が確認されたため、それぞれの調査区を拡張し、本発掘調査を実施することにした。本発掘調査の面積は、Ａ区が224㎡、Ｂ区が229㎡、Ｃ区が104㎡、Ａ・Ｂ区間トレンチ部が150㎡、その他拡張部70㎡で、計777㎡である（第6・7図）。

２　遺構調査の方法

Ａ・Ｂ・Ｃ区の地形と遺構内容がそれぞれ異なるため、調査区ごとに発掘調査を進めることとした。Ｂ区においては、一部基盤層まで掘り下げ、さらに下層の確認を行うことにした。

３　遺物の取り上げ

遺物は、遺物カードに遺物番号・出土年月日・地区名・遺構名・細部・層位・種別を記入し取り上げた。遺構内から出土した遺物については、原則として出土レベルと位置を記録することにした。

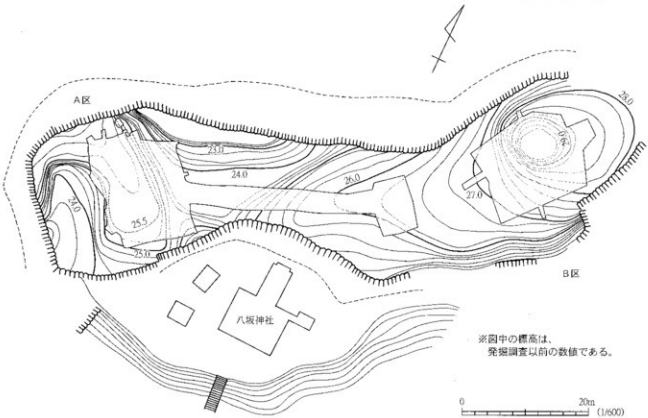
４　実測図の作成及び写真記録

平 面 図：原図の縮尺は、Ａ区では平場部分では1／20、東部・西部の溝跡等では1／40とした。Ａ区・Ｂ区間のトレンチ配置図などは1／100とした。Ｂ区・Ｃ区の遺構平面図は1／100で作成した。また、個別の遺構平面図は1／20とした。

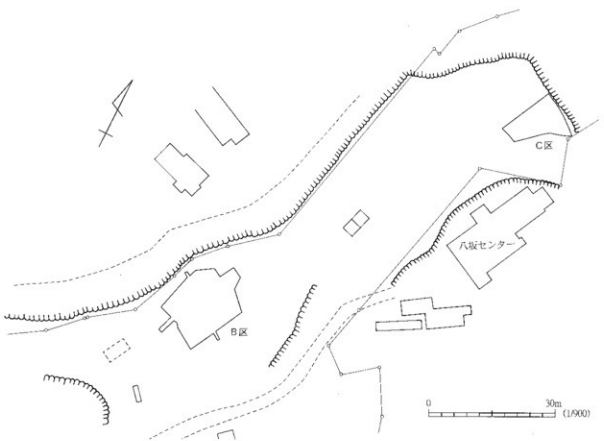
断 面 図：基本層位と遺構の堆積土の状態を示す断面図を作成した。原則として原図の縮尺は1／20とした。断面図は各層ごとに、色調・土質・混入物・堅さなどの注記を行った。

写真記録：記録写真は、35ミリ版のモノクロ写真・カラーリバーサル写真を基本とし、適宜6×7センチ版でも撮影を行った。

第５図　調査区位置図　仙台市文化財分布地図(1983.3.31)を基に作成



第６図　Ａ区・Ｂ区発掘調査区　　八坂神社現況図(昭和50年)



第７図　Ｂ区・Ｃ区発掘調査区　　(昭和50年)

第４章　遺構と遺物

第１節　基本層序

Ａ区・Ｂ区・Ｃ区においてそれぞれ遺構内容と層相が異なるため、調査区ごとに基本層等について述べる。

〔Ａ区の層序〕Ⅰ層からⅣ層に区分した（第8図）。Ⅳ層の下位は基盤層である。

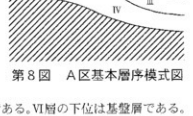
Ⅰ層は、暗黄褐色を呈する。現在の表土層である。厚さは10cmから25cm程度である。

Ⅱ層は、暗黄褐色を呈する。Ⅰ層に類似するが、より黒味が強く、しまっている。厚さは、最大で10cm程度である。

Ⅲ層は、灰黄褐色を呈する凝灰質シルト岩の風化土を主体とする。かなり粗く、しまっている。厚さは、最大で25cm程度である。Ⅱ層・Ⅲ層は、調査区西側には分布しない。

Ⅳ層は、基盤層起源と考えられる黄褐色を呈する凝灰質シルト岩または砂岩系風化土である。さらさらしており、きめが粗くしまっている。東に向かって傾斜している。遺構確認面である。

Ⅲ層は、土色・土質がⅣ層と類似することから、西側のⅣ層を削平して東側の低い部分を整地した可能性がある。調査区の西側は、表土の直下がⅣ層であり、中世の遺構もⅣ層上面から掘り込まれている。



第８図　Ａ区基本層序模式図

〔Ｂ区の層序〕Ⅰ層からⅦ層に区分した（第9図）。Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵの各層が基本層である。Ⅵ層の下位は基盤層である。

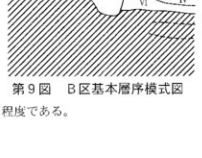
Ⅰ層は、暗褐色を呈する。現在の表土層である。厚さは最大で70cm程度である。中世陶器を含んでいる。

Ⅱ層は、褐色を呈する微砂層である。ややしまる。厚さは最大で30cm程度である。土坑堆積土と上色・土質が類似する。土坑はⅡ層中において確認されている。

Ⅲ層は、黄褐色を呈する砂層であり、しまっている。塚状遺構の北側に広く分布する。厚さは最大で30cm程度である。

Ⅳ層は、暗灰黄色を呈する砂層であり、ややしまっている。塚状遺構頂部において径6mほどの範囲で分布している。厚さは最大で15cm程度である。

Ⅴ層は、黄褐色を呈する微砂層であり、固くしまっている。塚状遺構の東側に部分的に分布する。厚さは最大で20cm程度である。



第９図　Ｂ区基本層序模式図

Ⅵ層は、オリーブ色を呈する砂層であり、しまりはない。厚さは最大で35cm程度である。

Ⅶ層は、オリーブ色を呈する砂層であり、固くしまる。

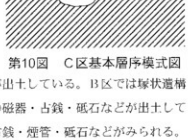
Ⅷ層は、明褐色を呈する砂岩である。

Ⅱ層は土坑掘乱時の排出土、Ⅲ層は盛土層、Ⅳ層は旧表土とみられ、Ⅴ層もその可能性がある。塚状遺構の東側では、Ⅱ層・Ⅲ層の分布はなく、遺構はⅣ層上面で確認される。

〔Ｃ区の層序〕Ⅰ層とⅡ層に区分した（第10図）。

Ⅰ層は、黒褐色を呈し、砂を含む。現在の表土層である。Ⅰ層の下位は基盤層である。浅い溝状の落込みが確認される。

Ⅱ層は基盤層である。近世の遺構は、Ⅱ層上面で掘り込まれている。



第10図　Ｃ区基本層序模式図

第２節　遺構と遺物

Ａ区では掘立柱建物跡と溝跡が検出され、上師器・須恵器・中世陶器・古銭が出土している。Ｂ区では塚状遺構とその中央に土坑が検出されている。土師器・須恵器・中世陶器・近世と近代の磁器・古銭・砥石などが出土しており、Ａ・Ｃ区より出土数が多い。Ｃ区では土坑墓群が検出され、近世陶器・古銭・煙管・砥石などがみられる。古銭の出土数が多い。以下、それぞれの調査区における検出遺構及び出土遺物について詳述する。

1　A区の遺構と遺物

A区で検出された遺構は、SB1建物跡が1棟、SD1・2の溝跡が2条、SX1・2その他の遺構が2基である。

建物跡は、広さ東西19m、南北約7mの平場上で発見された。その北側は尾根に直行する溝で区画されている。

〔建 物 跡〕

SB1建物跡

調査区中央部で検出された掘立柱建物跡である。規模は、中央桁行13.0m（柱間寸法205～225cm、平均216cm）、西側梁行5.6m（北側柱間寸法300cm、南側柱間寸法260cm）である。桁柱列の方向は、N－56°－Wである。柱穴の掘方は、不整方形又は不整円形を呈している。ピット1・4・7・8・10～12・15・16は、不整方形で、長軸25～31cm、短軸20～27cm、深さ16～39cmである。ピット2・5・13・14は、不整円形で、長径30～34cm、深さ16～29cmである。ピット1・2・13・14・15の底面には、円または不整円形の長径15～24cm、深さ7～15cmの柱痕がみられる。ピット1・2・15の柱痕は傾いている。また半場の東端に、段状遺構が張り出すように造り出されている。平坦面の規模は、長さ2.7m、幅1mほどである。この部分は、SD2・SX1と関連すると考えられる。

遺物は土師器片が3点、須恵器片が2点、陶器片が1点、古銭が1点出土している。第12図6は、ピット7の柱穴の堆積土上部から出土している。色調は茶褐色を呈し、器面はヘラ状工具や指頭による粗い横ナデ調整が施され、胎土は長石粒・小礫などを含む。「在地」産とみられ、年代は13世紀後半頃から14世紀前半である。第12図4は、ピット13の柱穴から出土した高台内にロクロによるヘラ削り痕をもつ須恵器片である。

〔溝　　跡〕

SD1溝跡

調査区北部で検出された直線的な溝跡である。規模は上幅2.9～4.6m、下幅2.2～2.7m、方向はN－44°－Wである。底面には、長軸に沿い一段下がる平担面を造り出している。底面の南側上段は、幅1.3～1.5m、溝の南側上端部との比高差は60～80cmである。北側下段は、幅0.5～0.8mと南側より狭く、北側上端部との比高差は20～40cm程度である。上・下段ともに南東から北西へ向かって緩やかな傾斜となっている。検出長は、11.7mであるが、さらに北西方向に続くものとみられる。上・下段の比高差は北西端で40cmである。溝の形状と堆積土から水が流れた形跡は認められない。

堆積土中から遺物は出土していない。

SD2溝跡

調査区の東端、SD1溝跡に東隅で接する直線的な溝跡である。規模は上幅1.7～2.1m、下幅1.1～1.2m、深さ12～30cmである。底面は平坦であり、南東から北西へ向かって緩やかな傾斜となっている。方向はN－47°－W、検出長は6.1mである。断面形は逆台形を呈しており、壁高は、南側がやや高いが、全体的には浅いテラス状の平坦面である。比高差はSD1底部の上段面より20cm低く、下段面より6cm高い。

堆積土中から遺物は出土していない。

〔その他の遺構〕

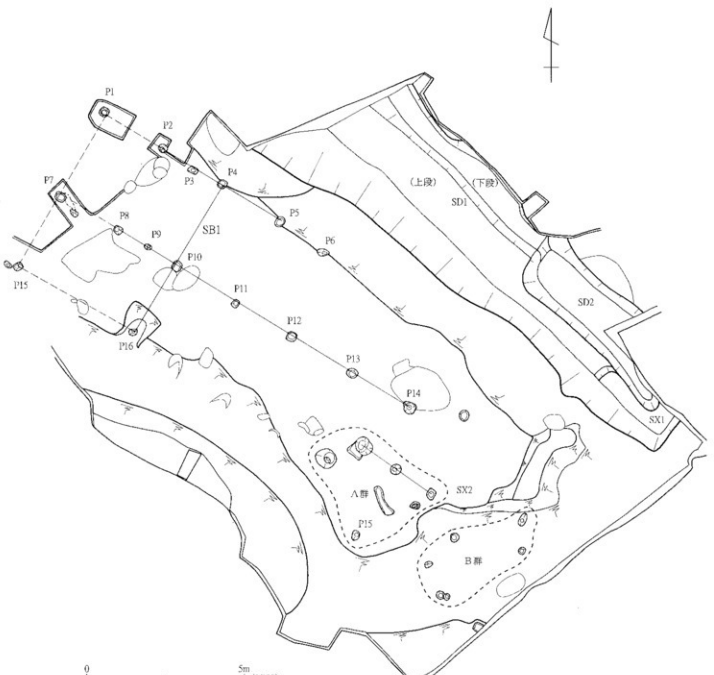
SX1その他の遺構

調査区の東端、SD2溝跡の南隅に接して、検出された段状遺構である。規模は長さ2.5m、幅40～60cmである。方向はN－44°－Wである。SD2溝跡の南隅を囲むようにL一段高い平坦面を造りだしており、南東から北西へ向かって緩やかな傾斜となっている。SD2との比高差は20cmほどである。

SX2その他の遺構

調査区の南部で検出された不規則な配置のピット群である。掘立柱建物跡がある平坦面に7個、その南東部の傾斜面に6個見つかり、それぞれA群、B群として述べる。

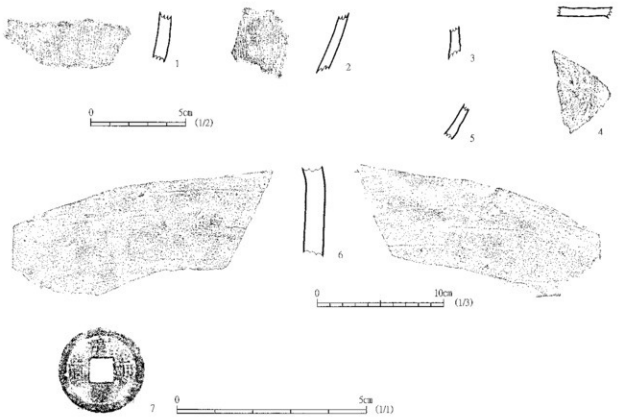
A群のピットの掘方は不整円形または不整方形を呈する。不整円形のピットの規模は長径34～70cm、短径25～60cm、



第11図　A区遺構平面図

深さ15～37cmである。不整方形のものは長軸30cm前後、短軸22～25cm、深さ28～50cmである。不整円形のピットの掘り方の規模は不整方形のものより大きく、深さは不整方形のものの方が深い。柱痕が残っているものがある。

B群はすべて不整円形を呈する。規模は長径25～40cm、短径20～27cm、深さは15～40cmである。掘り方の大きさは、A群の不整円形のものより小さなものが多い。



出土遺物（土師器・須恵器・陶器）観察表

番号	出土区・遺構・層位等	種別・器種・部位	特　　徴	産　地	年　代	残　存	拡量(cm)			写真図版	登録番号
							口径	底径	器高		
1	A区・P15	土師器・胴部	外面に刷毛目、炭化物付着	—	古代	破片	—	—	—	図版3A—7	5
2	A区	土師器・胴片	外面に刷毛目	—	古代	破片	—			図版3A　2	2
3	A区	土師器		—	古代	破片	—	—	—	図版3A—3	6
4	A区・P13	須恵器・底部	高台内：ロクロ痕	—	8c以降	破片		—	—	図版3A—4	11—1
5	A区	須恵器・体部	ロクロ痕	—	8c以降	破片	—	—	—	図版3A　5	11　2
6	A区・P7・上部埋土	陶器・蓋・胴部	外面・内面に横ナデ、胎土に長石粒・長石Aceの中礫混入	在地	13c後半～14c前半	破片	—	—	—	図版3A—6	3

出土遺物（金属製品）観察表

番号	出土区・遺構・層位	種別・器種	特　　徴	長さ(cm)	幅(cm)	重量	写真図版	登録番号
7	A区・1層・東コーナー	銅銭・寛永通宝	—	—	—	2.5	図版A—7	12

第12図　A区出土遺物

遺物は土師器片が3点出土している。

第12図1は、A群ピット15から出土した。外面に刷毛目痕がみられ、炭化物が付着している。第12図2は、刷毛目痕がみられ、3は細片である。

〔小　　結〕

1　掘立柱建物跡は、柱穴の掘方の形状と規模が県内の中世建物の傾向を示していること（文献5）、柱穴内から中世陶器片が出土していることから、中世に属することが推定される。

2　調査区北側で検出された大溝は、掘立柱建物のある平場を画しており、城館もしくは屋敷に関わる施設の可能性がある。また、大溝に接するテラス状遺構と段状遺構は階段状を呈しており、すぐ上の平場の東端にも段や柱穴群（SX2A群・B群）が認められることから、これらは出入り口部の施設と考えられる。

3　この平場には掘立柱建物跡の柱穴以外にピットが他に16個検出され、それらの形状は中世の特徴を示している。出土遺物は土師器細片である。

2　B区の遺構と遺物

B区で検出された遺構は、SM1塚状遺構が1基、SK1土坑が1基である。塚状遺構は、A区である丘陵突端の平場の北東約50mの尾根上にある。その頂部、調査区のほぼ中央で、平坦面と土坑が発見された。

〔塚状遺構〕

SM1塚状遺構

塚状遺構は、直径約9m、平面形は不整円形、高さ3mほどである。頂部に不整長方形の平坦面があり、規模は長軸5.1m、短軸4.1mである。方向はN－63°－Eである。この平坦面の標高は36.7mでA区の平場より10mほど高い。この面のほぼ中央でSK1土坑が検出されている。塚状遺構頂部付近E－E´№3部における層位は、Ⅰ層表土、Ⅱ層（褐色・微砂）、Ⅲ層（黄褐色・砂）、Ⅳ層（暗灰黄色・砂）、Ⅴ層（黄褐色・微砂）、Ⅵ層（オリーブ・砂）である。このうちⅣ層についてはしまりがあること、色調も他層と異なることから、旧表土とみられる。その上のⅢ層は軟質であり、盛土層である。

塚状遺構の斜面から、土師器片3点、須恵器片1点、中世陶器片7点、瓦1点、近世磁器片3点、近代磁器片8点、縄文土器片1点、砥石2点、古銭2点などが出土している。

第18図1～3・5・7は土師器、1と3は土師器壺の口縁部で、内外面に細かい刷毛目がみられ、横ナデによる調整後、赤彩が施されている。1の外面の赤彩は顕著である。いずれも4世紀（塩釜式期）のものである。7は土師器の壺か鉢の口縁部で、内外面に横ナデと赤彩がみられる。

第18図6は、須恵器である。外面は黒色処理されロクロ目があり、内面は横ナデである。

第18図8・9は、陶器である。8は小型壺の肩部で、外面に小菊の印花文、その下に沈線が施され、にぶい黄色の自然釉が認められる。内面は横ナデにより調整されている。13世紀前半、常滑産である。9は甕または壺の胴部で、塚状遺構の北西裾部から出土した。外面に格子目状の押印、ヘラナデなどによる調整痕がみられる。内面は横ナデにより調整されている。無釉である。12世紀前半、渥美産である。8・9は、ともに胎土は緻密で、堅く焼き締められている。

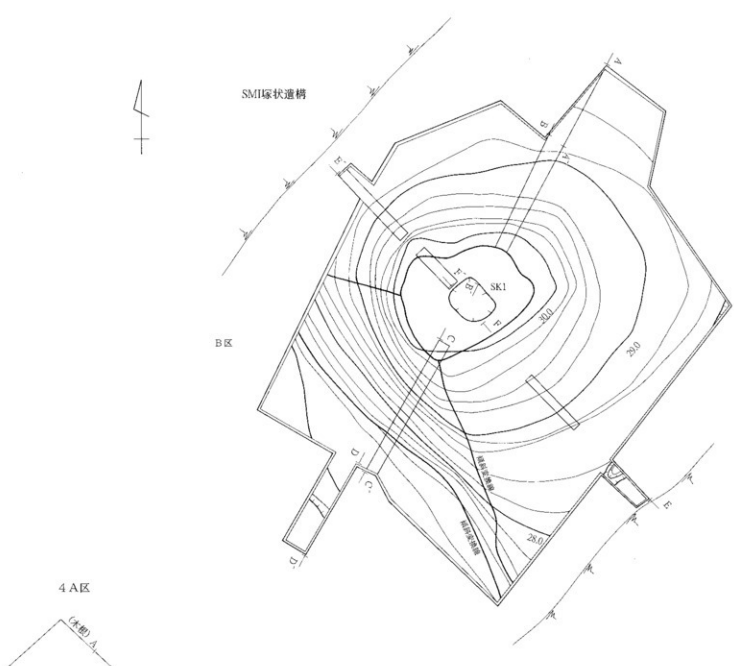
第19図1～5は、陶器である。1は壺または甕の肩部で、斜面から出土した。外面に灰の堆着がみられ、褐灰色を呈している。内面は亀裂があり指頭痕による修復、横ナデによる調整が施されている。にぶい赤褐色である。胎土に長石粒などを含む。13世紀～14世紀、在地産である。2～5は、須恵器系陶器である。2は壺または甕の胴部で、外面に平行叩きが施され、内面に横ナデによる調整を行った後、押圧を加えている。3は壺または甕の胴部で、外面に平行叩きが施され、灰黄色の自然釉が認められる。内面は横ナデによる調整を行っている。4は、壺または甕の胴部で、斜面から出土した。外面に平行叩きが施され、内面に横ナデと押圧による調整がみられる。5は、壺または甕の胴部で、外面に平行叩きが施され、内面に横位または斜位のナデと押圧による調整がみられる。2～5の年代は、12世紀後半から13世紀前半で、いずれも珠洲系陶器である。

第19図6は、近世の半胴である。

第19図7～9は、磁器である。7は染付皿で、見込に波文と口縁に雷文、外面に蝙蝠文がみられる。19世紀代、肥前産である。8は染付皿で見込に岩山文、高台内に角「青」字文がみられる。19世紀中頃、肥前産である。9は染付端反碗で、内外面に草花文がみられる。19世紀後半以降、瀬戸美濃窯の生産である。

第20図1～8は、磁器である。1・3・7は皿で、1は染付皿、3は草花文青磁皿、7は金彩色絵輪花皿である。2・4・5・6は急須で、2は染付花文をもつ胴部、4は染付岩文をもつ胴部、5は白磁の注口部、6は染付文様をもつ注口部である。8は染付鳥文碗である。1・2・4・8は洋呉須を使用しており、2・8は銅版転写、3は皿で型紙摺などの技法により製作されている。いずれも19世紀中頃以降のものである。産地は1が地方窯、3が瀬戸美濃窯である。

第20図9は、多条の縄文土器片で、繊維を若干含んでいる。縄文時代早期末葉のものである。



第13図　B区 遺構平面図

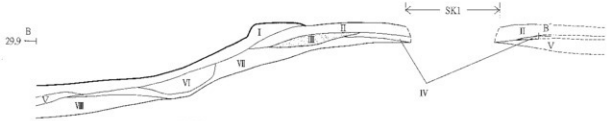
第21図1・2は、砥石である。1は4面に光沢がみられ、3面に擦痕がある。石質は砂岩で、硬質である。2は片面に磨面と斜位の細い剥離痕がみられ、その裏面に磨面、側面に擦痕が認められる。石質は泥岩で、軟質である。所謂仕上砥である。いずれも折損している。

第21図3は北宋銭である。紹聖元宝で、塚状遺構東南部から出土した。初鋳年は紹聖元年（1094）である。4は、新寛永の寛永通宝で、塚状遺構裾部から出土した。初鋳年は元禄10（1697）年である。

土層註記

層位	色調	土性・混入物など
I	暗黄褐色	しまりあり、シルト粉末小礫・炭及びスコリア殻を含む
II	〃	〃 ，I層に縮似するが黒味が強い
III	灰黄褐色	〃 ，かなり粗、凝灰質シルト岩の風化土下体とし、小礫・炭粒を含む
IV	黄褐色	〃 ，粗、凝灰質シルト岩もしくは砂岩の風化土

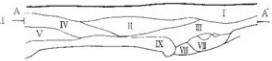
第14図　4A区北東壁断面図



土層註記

層位	色調	土性	混入物・その他
I	7.5YR3/4 暗黄色	微砂	しまりなし、表土
II	7.5YR4/4 褐色	〃	しまりあり
III	10YR4/4 褐色	粘土質微砂	〃 ，礫を含む、3′B′図V層と同じ
IV	10YR5/8 黄褐色	〃	〃 ，礫・炭化物を含む
V	2.5Y3/4 黄褐色	砂	〃 ，礫を含まない
VI	2.5Y3/3 黄黄色	粘土	〃
VII	10YR6/6 明黄褐色	砂	〃 ，礫を含む、地山
VIII	7.5YR2/2 黒褐色	微砂	〃 ，〃
IX	7.5YR3/4 暗褐色	〃	〃 ，〃

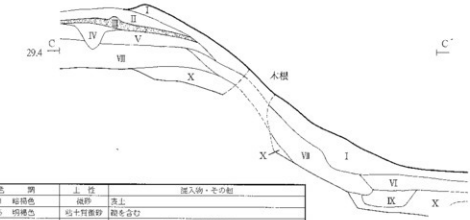
B区塚状遺構（A－A′）断面図



土層註記

層位	色調	土性	混入物・その他
I	7.5YR3/4 暗黄色	微砂	しまりなし、表土
II	7.5YR2/6 明黄色	粘土質微砂	〃 ，礫を含む
III	7.5YR4/3 褐色	〃	〃
IV	7.5YR4/3 にぶい黄色	砂質粘土	しまりあり
V	10YR4/4 褐色	粘土質微砂	〃 ，礫を含む
VI	10YR3/4 暗褐色	砂	〃 ，〃
VII	2.5Y6/6 明黄褐色	〃	〃 ，〃 ，地山1層
VIII	10YR5/6 黄褐色	粘土質微砂	〃 ，礫を含まない、地山2層

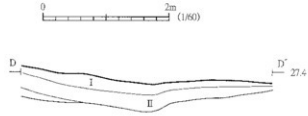
B区塚状遺構（B－B′）断面図



土層註記

層位	色調	土性	混入物・その他
I	7.5YR3/4 暗褐色	微砂	表土
II	7.5YR5/6 明褐色	粘土質微砂	礫を含む
III	7.5YR5/4 褐色	〃	〃 ，粘表土の可能性有り
IV	10YR5/4 にぶい黄色	〃	〃
V	2.5Y5/6 明黄褐色	〃	〃
VI	2.5Y6/6 明黄褐色	〃	礫を多量に含む、地山1層
VII	2.5Y6/6 明黄褐色	砂	礫を含まない
VIII	2.5Y6/6 明黄褐色	〃	礫を含む、VII層よりやや粗い
IX	10YR5/4 にぶい黄褐色	〃	礫を含まない
X	5YR8/3 黄黄色	〃	地山2層

B区塚状遺構（C－C′）断面図

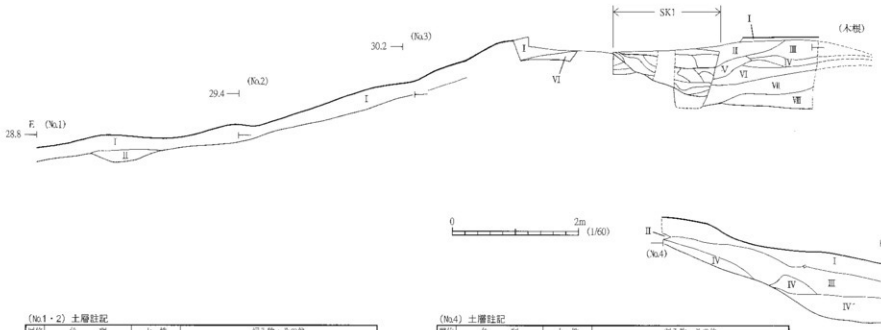


土層註記

層位	色調	土性	混入物・その他
I	7.5YR3/4 暗褐色	微砂	しまりなし、表土
II	7.5Y5/4 褐色	砂	しまりあり

B区塚状遺構（D－D′）断面図

第15図　B区塚状遺構（A－D′）断面図



(No.1・2) 土層註記

層位	色	調	土 性	混入物・その他
I	7.5YR3/4	暗褐色	微砂	しまりなし，礫を含む，表土
II	2.5Y6/6	明黄褐色	粘土質微砂	しまりあり，礫を含まない

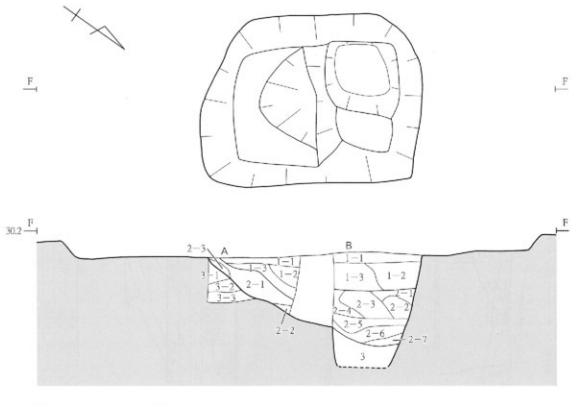
(No.3) 土層註記

層位	色	調	土 性	混入物・その他
I	7.5YR3/4	暗褐色	微砂	しまりなし，表土
II	7.5YR4/6	褐色	〃	しまりあり
III	2.5Y5/6	黄褐色	砂	しまりなし，礫を含む
IV	2.5Y4/2	明黄褐色	〃	しまりややあり，礫を含む
V	2.5Y5/6	黄褐色	微砂	しまりあり，礫を含まない
VI	5Y5/4	オリーブ	砂	しまりなし，礫を含む
VII	5Y6/4	オリーブ黄	〃	しまりあり，礫を含む，地山
VIII	7.5YR5/8	明褐色	微砂	〃 ，礫を含まない

(No.4) 土層註記

層位	色	調	土 性	混入物・その他
I	7.5YR3/4	暗褐色	微砂	しまりなし，表土
II	5Y6/6	オリーブ黄	砂	しまりあり
III	2.5Y5/4	黄褐色	〃	〃
IV	2.5Y6/6	明黄褐色	〃	〃 ，地山1層
IV´	2.5Y6/6	明黄褐色	シルト，微砂	〃 ，地山2層，シルト，礫，砂の互層

第16図　B区塚状遺構（E−E´）断面図



土層註記A

層位	色調	土性	混入物・その他
1−1	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	
1−2	10YR5/6 黄褐色	〃	
1−3	10YR5/4 にぶい黄褐色	〃	
2−1	10YR5/8 明黄褐色	〃	粒がこまい
2−2	10YR5/4 にぶい黄褐色	〃	粒が粗い、径3mm
2−3	10YR5/4 にぶい黄褐色	〃	
3−1	10YR5/6 黄褐色	〃	
3−2	10YR5/8 黄褐色	〃	粒が粗い
3−3	10YR6/6 明黄褐色	〃	粒がこまい

土層註記B

層位	色調	土性	混入物・その他
1−1	10YR3/3 黒褐色	砂質シルト	
1−2	10YR2/3 黒褐色	〃	粒状に暗褐色シルトを含む
1−3	10YR3/3 黒褐色	〃	
2−1	10YR2/3 にぶい黄褐色	〃	1−2より多く暗褐色シルトを含む
2−2	10YR3/3 暗褐色	シルト	ブロック
2−3	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	1−2に類似、1−2よりこまい
2−4	10YR3/3 暗褐色	シルト	ブロック
2−5	10YR3/3 黒褐色	砂質シルト	
2−6	10YR2/3 にぶい黄褐色	〃	小ブロック状に暗褐色シルトを含む
2−7	10YR3/4 にぶい黄褐色	〃	2−6より多量に暗褐色シルトを含む
3	10YR5/8 黄褐色	〃	

第17図　B区SK1土坑平面図・断面図

〔土　坑〕

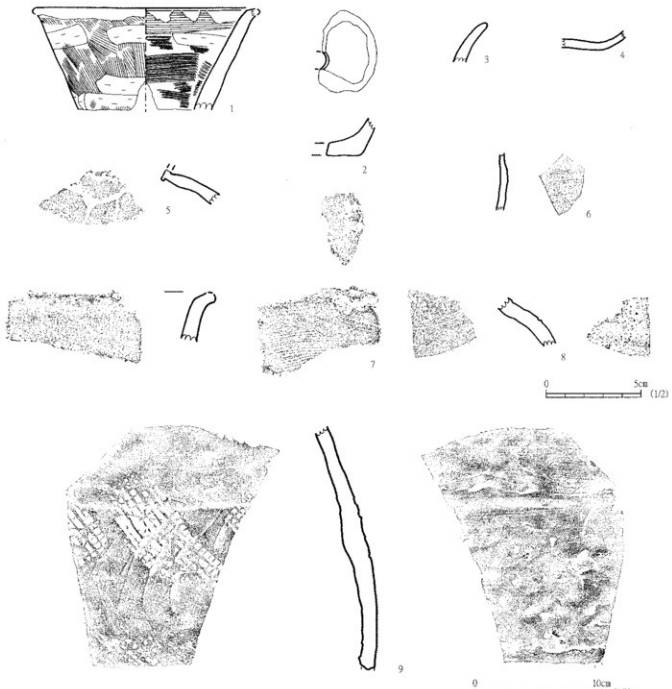
SK1土坑

塚状遺構のほぼ中央で検出された土坑である。長軸1.75m、幅1.35mの不整長方形で、深さ75cmである。長軸の方向は、N−37°−Wである。底面は、北側に落ち込みがみられるなど、凹凸が著しい。壁面は、北壁が急激に立ち上がるのに対し、底面から南壁にかけては緩やかな傾斜となっている。土層観察は、SK1の南側(A)と北側(B)に分けて行った。AとBはそれぞれ層相が異なるが、堆積土はおおむね3層に分けられる。1層は黄褐色の砂質シルトを主体とし、1−1〜3層に細別される。下層はにぶい黄褐色あるいは暗褐色の砂質シルトを主体とし、2−1〜7層に細別される。3層は黄褐色の砂質シルトを主体とする。Aでは、3−1〜3層に細別される。1〜3層いずれも非常に軟質である。

堆積土中より土師器片が2点、土師質土器が1点出土している。

第18図2・5は土師器である。2は壺または鉢の底部片である。底面に焼成前の穿孔があり、甑である可能性が高い。5は、土師器壺の肩部片とみられ、外面に赤彩痕があり、内面にヨコナデと指頭による押圧が加えられている。

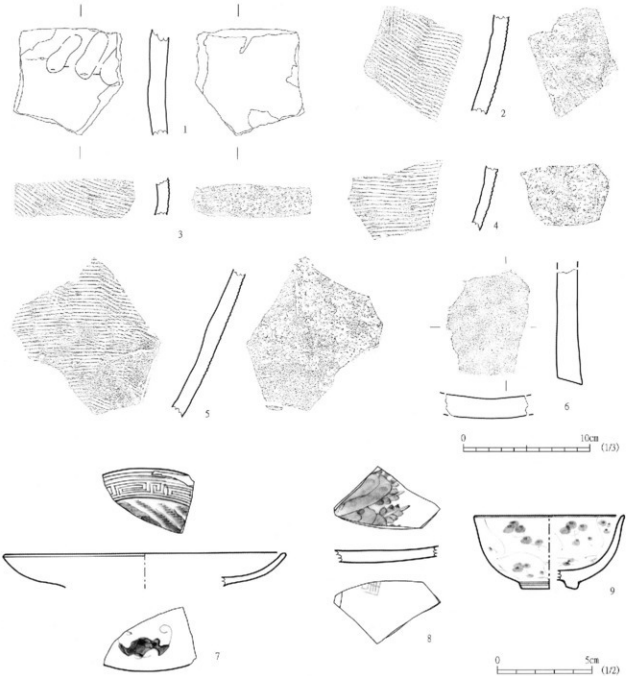
第18図4は、土師質土器皿の底部片である。



出土遺物（土師器・須恵器・陶器）観察表

番号	出土地点・遺構・層位等	種別・器種・部位	文様・特徴 等	胎 土	年 代	残 存	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	写真図版	登録番号
1	B区	土師器・壺・口縁部	内外面に刷毛目、外面：赤彩	—	4c（遺墓式期）	1/5	13.0	—	—	図版3、B-1	表C　1、1
2	B区・SK1	土師器・甕・底部	底部輪痕駆除母孔	—	古代	破片	—	—	—	図版3、B-2	表C—1、2
3	B区	土師器・壺・口縁部	内外面に刷毛目、内外面：赤彩	—	4c（遺墓式期）	破片	—			図版3、B-3	表C　1、3
4	B区	土師器土器・高・底部	ロクロ回転方向不明	—	中世か	破片	—	—	—	図版3、B-4	表A—2、1
5	B区・SK1	土師器・甕・胴部	赤彩？	—	古代	破片			—	図版3、B-5	表C—1、3
6	B区	須恵器	外面黒色処理		古代	破片	—	—	—	図版3、B-6	表A—2、5
7	B区	土師器・壺・口縁部	内外面に刷毛目、外面：赤彩	—	4c（墓墓式期）	破片	—	—	—	図版3、B-7	表C—1、4
8	B区	陶器・皿・高台	貿易陶磁文　皮鯨	堅緻	13c 後半	破片	—			図版3、B-8	表C　1、
9	B区	陶器・壺・胴部	外面：格子目叩き	良好	12c 後半	破片	—	—	—	図版3、B-9	

第18図　B区出土遺物(1)



出土遺物（陶磁器）観察表

番号	当B区・遺構・層位等	種別・器種・部位	文様・技法等	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	B区・1層	陶器・瀬・瀬戸	施釉二重掛け、内面：灰釉底	在地	12c後半～14c前半	破片	—	—	—	図版4, B-8	B2-4
2	B区	黒色土器A類・墨小皿・瀬戸	外面：平行平さ、試掘調査時	瀬戸系	12c後半～13c前	破片	—	—	—	図版4, B-11	B2-2
3	B区	黒色土器A類・墨小皿・瀬戸	外面：平行平さ、試掘調査時	瀬戸系	12c後半～13c前	破片	—	—	—	図版4, B-12	B2-2
4	B区・1層	黒色土器A類・墨小皿・瀬戸	外面：平行平さ	瀬戸系	12c後半～13c前	破片	—	—	—	図版4, B-13	B2-3
5	B区・中央部	黒色土器A類・墨小皿・瀬戸	外面：平行平さ、底板	瀬戸系	12c後半～13c前	破片	—	—	—	図版4, B-14	B2-1
7	B区	磁器・皿・口縁部	染付、外面：唐草文、内面：雷文・渦文？	肥前	19c	1/12	5.0	—	(1.7)	図版4, B-5	C1-5
8	B区	磁器・皿・底部	染付、見込：沢に草文、高台内：銘、施釉底	肥前	19c前半～中頃	—	—	—	—	図版4, B-17	C1-7
9	B区	陶器・鉢	施釉、染付	瀬戸美濃	19c後半～	1/5	8.0	3.6	3.9	図版4, B-18	C1-9

出土遺物（瓦）観察表

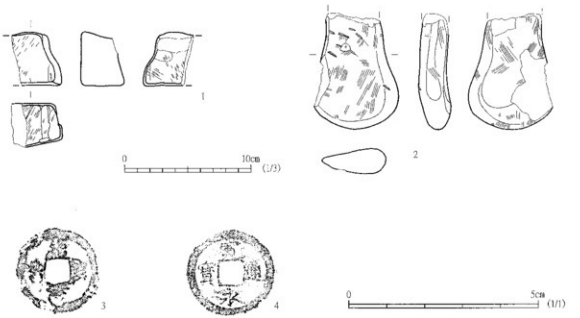
番号	当B区・遺構・層位等	種別・器種・部位	文様・技法等	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
6	1層	平瓦	0BM, 75120A, 3IK, 10	—	近世？	—	—	—	—	図版4, B-15	C1-6

第19図　B区出土遺物(2)

出土遺物（陶磁器・縄文土器）観察表

番号	出土区・遺構・層位等	器種・部位・部位	文様・技法等	産　地	年　代	残　存	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	写真図版	登録番号
1	B区	磁器・皿・口縁部	染付、浮彫風、湖絵	地方産	明治前半	—	—	—	—	図版4、B-19	C1－10
2	B区	陶器・急須・口縁部、底部	染付、外面：菊文、底部露胎、浮彫状回転糸切	—	明治中頃～20c	1／10	(6.8)	(5.4)	—	図版4、B-20	C1－6
3	B区	磁器・碗	雪輪、草花文、白磁、型紙刷	瀬戸美濃	明治	1／2	12.6	7.2	2.0	図版4、B-21	C1－11
4	B区	磁器・染付・胴部	染付、浮彫風		明治～	—	—	—	—	図版4、B-22	C1－13
5	B区	磁器・急須・胴部	白磁		近代	—	—	—	—	図版4、B-23	C1－9
6	B区	磁器・急須・注口部	染付、浮彫風、並底穴3個	—	近代	注口のみ	—	—	—	図版4、B-24	C1－9
7	B区	磁器・蓋か体・口縁部	染付、内面：色絵、金彩、武田	—	近代	—	—	—	—	図版4、B-25	C1－14
8	B区	磁器・碗・底部	雪輪繋ぎ、染付、外面：梅文、鶏台向に染付文様、浮彫風、銅板転写	—	19c～　20c	—	—	—	—	図版4、B-26	C1－8
9	B区	縄文土器片	RL多条文、縦施若干含む	—	早期末	—	—	—	—	図版5、B-27	A3－7

第20図　B区出土遺物(3)



出土遺物（石製品）観察表

番号	出土区・遺構・層位等	種別・器種	特　徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
1	B区・1層？	石製品・砥石	3面に擦痕、折損	(4.0)	4.3	3.5	(78.4)	砂岩	図版5.B−20	A1−2
2	B区・1層？	石製品・凹石	両面中央に敲痕・片面に擦痕、折損	(9.0)	6.5	2.3	(121.8)	粘板	図版5.B−28	A1−1

出土遺物（金属製品）観察表

番号	出土区・遺構・層位等	種別・器種	特　徴	長さ(cm)	幅(cm)	重量	写真図版	登録番号
3	B区・1層・東端部	銅銭・皇宋	初鋳年：北宋・1094年）	—	—	2.5	図版5.3−30	C1−1
4	A区・1層・スソ部	銅銭・景永通宝	新寛永	—	—	2.1	図版5.3−31	A1−3

第21図　B区出土遺物(4)

〔小　結〕

1　塚状遺構は、丘陵の頂部を削平し、30cm前後の盛土をしてさらに斜面を整形して構築している。その斜面から渥美産陶器（12世紀後半）が出土した。このことから、当初、塩墓・経塚などの信仰の場であった可能性がある。

2　塚状遺構中央で検出された土坑は、堆積土の層位が乱れており軟質であること、底面の凹凸が著しいことから、後世に攪乱を受けたとみられる。

3　出土遺物の年代は、縄文時代・古墳時代・中世・近世・近代と多岐にわたる。

4　中世陶器は、常滑（愛知県）・渥美（愛知県）・珠洲系（日本海側？）・白石古窯跡群（宮城県）・在地と、東日本各地で生産されたものである。

5　ほかに、近世・近代の磁器・瓦・古銭・砥石などが出土している。古墳・中世・近世・近代の各時代の遺物が混在して斜面から出土している。

3　C区の遺構と出土遺物

C区で検出された遺構は、SD1～3の溝跡が3条、SK1～5の土坑が5基である。これらの遺構は、C区の南西部において集中して発見された（第22図）。

〔溝　　跡〕

SD1溝跡

調査区南西部で検出された直線的な溝跡で、東側は浅くなって途切れる。規模は上幅90～160cm、下幅35～140cm、深さ17～30cm である。底面にはゆるやかな凹凸が認められる。方向は、N－76°－E.である。検出長は約8mであるが、さらに調査区外の西側へ続くものとみられる。

堆積土中から遺物は出土していない。

SD2溝跡

調査区南西部で検出された溝跡で、南半部がSD1に切られており、東側は浅くなって途切れる。規模は、残存値で、上幅最大90cm、下幅最大60cm、深さ9～20cm である。底面にはゆるやかな凹凸が認められる。方向は、N－67°－E.である。検出長は約6.3mで、北辺は凹凸があり直線的でない。

堆積土中から遺物は出土していない。

SD3溝跡

調査区南西端で検出された直線的な溝跡である。南側の大部分が現在通路として使用されている。規模は、残存値で、上幅最大50cm、下幅最大14cm、深さ10～20cm である。底面にはゆるやかな凹凸が認められる。方向は、N－71°－E.である。検出長は約5.2mであるが、さらに調査区外の西側へ続くものとみられる。

堆積土中から遺物は出土していない。

〔土　　坑〕

SK1土坑

C区南側で検出された。北半部はSD1に切られている。規模は長軸95cm、短軸90cm の不整円形で、深さは40cm である。断面形はやや開いた半円形を呈し、北側壁面に弱い段をもつ。堆積土は3層に分けられ、1層が暗褐色の砂質シルト、2層が骨片を含む黒色のシルト、3層がシルト質の砂である。

遺物は堆積土中から陶器碗が1点、古銭が5点、煙管が1点、骨片が多く出土している。第26図1は、18世紀代の肥前陶器碗である。第26図2の煙管は、火皿と脂返しの境にある補強帯がみられないことと、その形態から小泉編年（1983）第4段階18世紀後半に位置付けられる。第26図3～7の古銭は、永楽通宝が1点、寛永通宝が4点である。永楽通宝は明代永楽6年（1408）が初鋳年とされ、寛永通宝はいずれも古寛永であり、寛永13（1636）年から万治2年（1659）までの鋳造である。

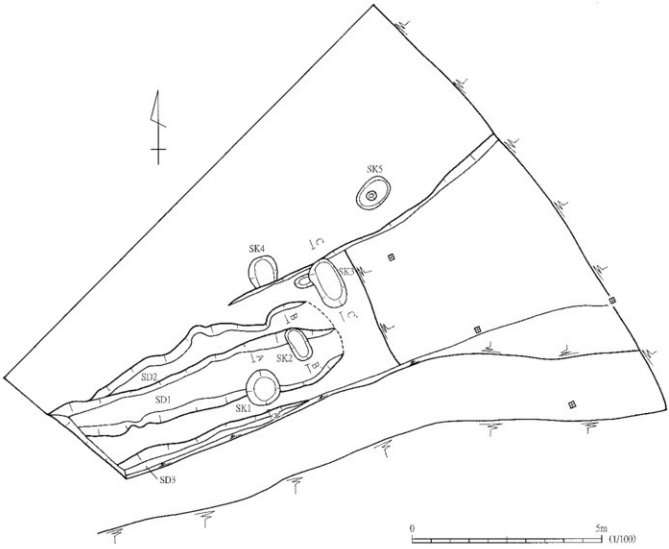
SK2土坑

C区南側、SK－1土坑の北隣で検出された。上部をSD1に切られている。規模は長軸89cm、短軸44cm の不整な長円形で、深さは20cm と浅くなっている。長軸の方向は、N－30°－Wである。断面形は浅い船底形を呈し、底面はほぼ平坦で、北側壁面は西側よりも緩い傾斜となる。堆積土は2層に分けられ、1層が褐色の砂質シルト、2層が暗褐色の砂質シルトである。

遺物は堆積土中から古銭が6点出土している。第26図8～12の古銭はいずれも寛永通宝で、8・9・12は古寛永であり、10は新寛永で寛文8年（1668）から天和3年（1683）まで江戸亀戸で鋳造された。背面に「文」字を有する所謂文銭である。11は欠損しているため、鋳造年代等については不明である。

SK3土坑

C区中央において検出された。北西隅の小ピットを切っている。規模は長軸125cm、短軸67cm の不整な長円形で、深さは上部が攪乱を受けているため推定値で35cm 程度と見られる。長軸の方向は、N－27°－Wである。断面形は浅い船



第22図　C区遺構平面図

底形を呈し、底面は、緩やかな凹凸がみられる。堆積土は7層に分けられる。1～4層は黄褐色の砂質シルトを主体とする。5･6層は褐色または暗褐色の粘土質シルトを主体とし、粘性がある。7層は黄褐色のシルト質砂である。

堆積土中から出土遺物はない。

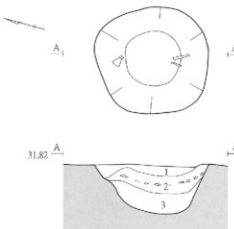
SK4土坑

C区中央で検出された。南端部が削平されている。長軸80cm（残存値）、短軸70cmの不整な長円形で、深さは17cmと比較的浅い。長軸の方向は、N－9°－Wである。断面形は、船底形を呈するとみられる。

堆積土中から遺物は出土していない。

SK5土坑

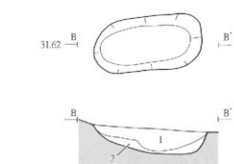
C区北側で検出された。規模は長軸90cm、短軸70cmの不整な長円形で、深さは10cm程度で浅い。長軸の方向は、N－52°－Eである。底面中央に径20cm、深さ15cm程度の小ピットがある。堆積土は暗灰黄色シルト質砂、小穴は暗褐色砂質シルトである。



C区第1土坑土層註記

層位	色　調	土　性	混入物・その他
1	10YR3/3　暗褐色	砂質シルト	
2	10YR1/1　黒色	〃	骨片を含む
3	10YR7/1　褐色	〃	

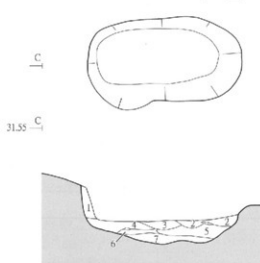
第23図　C区SK1土坑平面図・断面図



C区第2土坑土層註記

層位	色　調	土　性	混入物・その他
1	10YR4/1　褐色	砂質シルト	
2	7.5YR3/3　暗褐色	〃	

第24図　C区SK2土坑平面図・断面図



C区第3土坑土層註記

層位	色　調	土　性	混入物・その他
1	10YR4/3.5　にぶい黄褐色	砂質シルト	
2	10YR5/5　にぶい黄褐色	〃	
3	10YR4/4　褐色	〃	5層よりやや暗い
4	10YR5/5　にぶい黄褐色		
5	10YR4/5　褐色		やや粘質性有り
6	10YR3/2　暗褐色	粘土質シルト	
7	2.5YR5/4　黄褐色	シルト質砂	

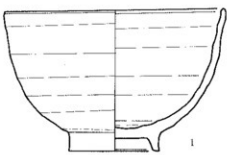
第25図　C区SK3土坑平面図・断面図

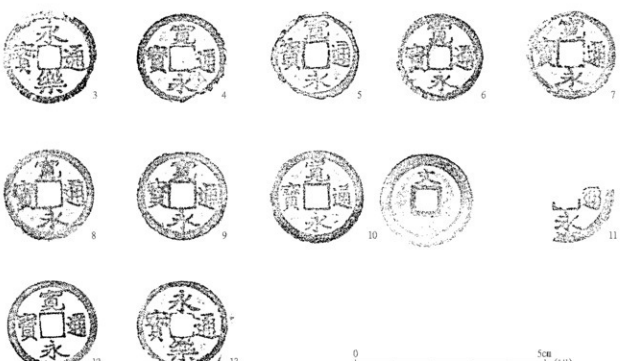
堆積土中から遺物は出土していない。

〔小　結〕

1　溝跡は3条とも比較的浅く、ほぼ同じ方位である。この小独立丘陵上の通路としての性格が窺える。

2　土坑について、SK－1・2は出土遺物から近世の土坑墓と判断した。SK－3は方位・形状がSK－2と類似しており、堆積土からも土坑墓と考えられる。SK－4・5の性格等は、不明である。





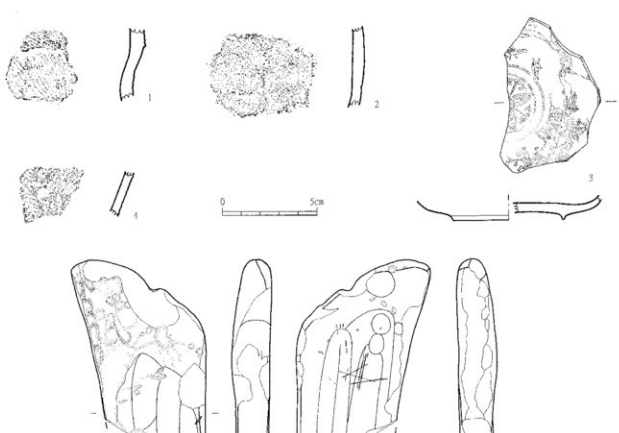
出土遺物（陶磁器）観察表

番号	出土区・遺構・層位等	種別・器種・部位	文様・技法等	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	CFA・SK1	陶器・碗	灰釉陶ハジケ、畚谷沼産物	肥前	18c	1/3	11.7	4.8	7.7	図版5、C-1	A2 .1

出土遺物（金属製品）観察表

番号	出土区・遺構・層位等	種別・器種	特　徴	法量(cm)		重量(g)	写真図版	登録番号
2	SK1	煙管・火皿及び首部	ラウ残存、古原輪寺：開元通宝？	全長	3.8	4	図版5、C-2	A2 .0
				火皿口径	.5			
				ラウ径	0.8			
3	CFA・SK1	銅銭・永楽通宝	正字、輪入広、1408年初鋳	—	—	3.1	図版5、C-3	A1－1
4	CFA・SK1	銅銭・宝永通宝	古寛永？、和A-1・2は異書	—	—	2.2	図版5、C-4	A1－3
5	C4a・SK1	銅銭・寛永通宝	古型永？	—	—	2.1	図版5、C-5	A1－7
6	CFA・SK1	銅銭・寛永通宝	古寛永	—	—	2.5	図版5、C-6	A1 8
7	C4a・SK1	銅銭・寛永通宝	古寛永、和A-7～9は1次変遷			3	図版5、C-7	A－9
8	C4a・SK2	銅銭・寛永通宝	古型永	—	—	3.7	図版5、C-8	A－5
9	CFA・SK2	銅銭・寛永通宝	古寛永	—	—	3.8	図版5、C-9	A－6
10	C4a・SK2	銅銭・寛永通宝	新鋳「文」文銭、新寛永	—	—	3.7	図版5、C-10	A1－6
11	CFA・SK2	銅銭・寛永通宝	古寛永	—	—	0.8	図版5、C-11	A1 10
12	CFA・SK2	銅銭・寛永通宝	古寛永			3.6	図版5、C-12	A1－11
13	C4a・包土	銅銭・永楽通宝	正字、輪入広、1408年初鋳	—	—	2.6	図版5、C-13	A1－14

第26図　C出土遺物(1)



出土遺物（土器・陶磁器）観察表

番号	出土区・遺構・層位等	種別・器種・部位	文様・技法等	産地	年代	残存	位置(cm) 口径	底径	器高	写真図版	整理番号
1	C区・表採	土師器・口縁部	二重口縁，外面：刷毛目，内面：横ナデ		4c（塩屋式期）	破片	—	—	—	図版6, C−4	表C−1, 9
2	C区・表採	土師器・胴部	外面：刷毛目，底部調整痕	—	4c（塩竈式期）	破片		—	—	図版6, C−15	表C−1, 4
3	C16・表採	須恵器・甕・底部	見込二重直線沈に花文・柱状文・鳥文様か	瀬戸窯産	明治後半	—	—	3.8)	—	図版6, C−17	若A 2,2
4	C区・表採	磁器・皿	染付		現代	破片	—			図版6, C−16	表C−1, 3

出土遺物（石製品）観察表

番号	出土区・遺構・層位等	種別・岩種	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	整理番号
5	C区・表採	若狭塗・砥石	両面及び四側縁に使痕，片面に擦痕	16.3	10.7	3	640.5	頁岩	図版6, C−18	A1−3

第27図　C出土遺物(2)

○若宮前遺跡出土陶器について

若宮前遺跡出土陶器などについて，平成21年12月21日，財団法人福島県文化振興事業団飯村均氏を招き，中世陶器について検討会を行った。同氏による教示内容は，次のとおりである。

1　B区で出土した平行叩きのある中世陶器（第19図2〜5）は，珠洲系のものとみられ，叩きは矢羽根状を呈しており，原体の幅がせまいものは，珠洲Ⅰ期後半（12世紀後半）の年代である。内面は無文で石などを当て具として使用した可能性がある。

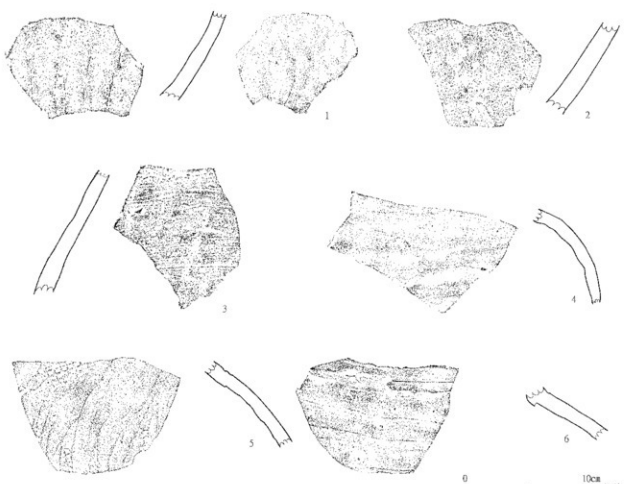
　焼坂窯のものは鉄分を含み，また整った叩きはみられない。内面は青海波の当て具痕跡である。

2　B区で出土した菊花印花文のある中世陶器（第18図8）は，常滑焼で，菊花印花文は三筋壺などにみられる。

3　A区で出土した正格子の押印のある中世陶器（第18図9）は，渥美産とみられ，12世紀後半から13世紀前半までみられるものである。器面の押印については，「不規則な押印」→「押印帯の形成」→「肩部のみの押印」という流れがある。

○鴻ノ巣遺跡表面採集資料について

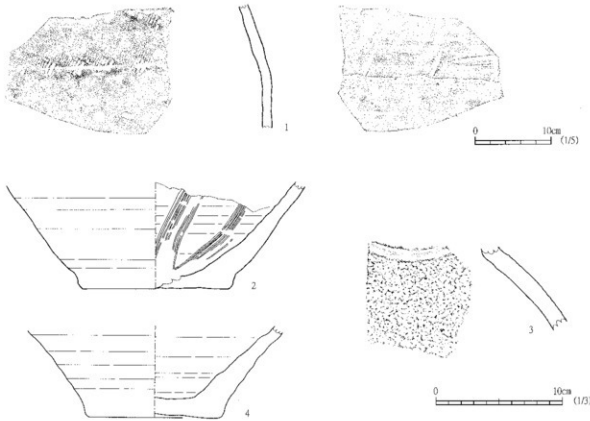
第28図・第29図の陶器については、弘前大学人文学部教授関根達人氏が表採したもので、採取地点について伺ったところ、平成元年に七北田川南岸の東北新幹線の高架橋の真下の中洲で採取したとの教示があった。鴻ノ巣遺跡の遺物である。なお、飯村氏から第29図2・4の鉢類は白石窯産であり、第12図6・第28図2のA区出土の中世陶器については在地産のものであるとの教示があった。



出土遺物（陶器）観察表

番号	出土区・遺構・層位等	種別・旋帯・部位	文様・技法等	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	表採	陶器・甕・胴部		常磐か	中世	破片	—	—	—	図版7, 表−1	B2−6
2	表採	陶器・甕・胴部	胎土：長石粒	在地	13c後半〜14c前半	破片		—	—	図版7, 表−2	B2−7−1
3	表採	陶器・甕ヵ・胴部		常磐	中世	破片	—	—		図版7, 表−3	B2−7−2
4	表採	陶器・壺ヵ・胴部		常磐	12c中頃〜後半	破片	—	—	—	図版7, 表−4	B2−7
5	表採	陶器・鍋か鍋・胴部	外面：格子状押印	常磐	13c前半	破片			—	図版7, 表−5	B2−3−2
6	表採	陶器・甕・口縁部	胎土：砂 鉄部に明き塩	瀬美	12c	破片	—	—		図版7, 表−6	B2−3−1

第28図　鴻ノ巣遺跡表面採集資料(1)



出土遺物（陶器）観察表

番号	出土区・遺構・遺物等	種別・器種・部位	文様・技法等	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	表採	陶器・硬ツ・胴部	外面：緑白面叩き、胎土：砂目	京都か	12c	破片	—	—	—	図版7, 表－7	B2－1
2	表採	陶器・胴部・底部	無釉、胎土：長石粒、内面：底部磨耗	口石発	13c後半～14c前半	破片	—	12.0	—	図版7, 表－8	B2－4
3	表採	瓦質土器・壺か火鉢・胴部	外面：鮫肌状、浅い沈線	—	近世	破片	—	—	—	図版7, 表－10	B2－5
4	表採	陶器・鉢かこね鉢・底部	胎土：長石粒	白石発	13c後半～14c前半	破片	—	11.0	—	図版7, 表－9	B2－3

第29図　鴻ノ巣遺跡表面採集資料(2)

第5章　自然科学分析

若宮前遺跡出土および鴻ノ巣遺跡表面採集の中世陶器の蛍光X線分析

大阪大谷大学　三　辻　利　一

1）胎土分析の考え方

土器の素材である粘土は岩石が風化して生成したものである。しかし、やきものの素材として使われてた粘土は自然界に存在するごく一部の粘土にすぎない。したがって、土器の産地を探る場合には、自然界に産する粘土をそのまま、分析対象としてもどうにもならない。出来上がった製品が分析対象となる。そうなると、土器を製作した場所、窯跡が生産地となる。基礎データを得るためにはまず、須恵器、中世陶器などの生産地である窯跡が残っている土器が産地問題の研究の分析対象となる。こうした考え方から、全国各地に数千基はあるといわれる須恵器窯跡から出土した須恵器破片がまず、分析対象として取り上げられることになった。

長い年月をかけて、全国各地の多数の窯跡出土須恵器片を大量に分析した結果、K、Ca、Rb、Srの4元素が有効に地域差を示すことが実証された。通常、地域差はK-Ca、Rb-Srの両分布図上で目に見えるかたちで表される。これらの元素は蛍光X線分析で容易に分析できる。

ついで、なぜ、これら4元素が有効に地域差を表すのかを知るため、日本列島の地質の基盤を構成する花崗岩類の破片を全国各地から大量に採集し、分析した。その結果、K、Caは火成岩を構成する主要造岩鉱物の中で、最も重要な鉱物である長石類中に主として含有されることが分かった。さらに、微量元素Rb、Srは花崗岩類中では主成分元素K、Caとそれぞれ、正の相関性をもつことも実証された。このことはマグマから花崗岩類を生成する過程で微量元素RbとSrはそれぞれ、主成分元素KとCaと挙動をともにしたことを示唆している。したがって、微量元素Rb、SrはK、Caとともに、花崗岩類中の長石類（カリ長石と斜長石）中に共存していると考えられた。

他方、K、Ca（Rb、Sr）は岩石の風化過程で溶出し易い元素である。したがって、粘土中のこれらの元素の含有量は母岩にくらべて相当減少している。それにも関わらず、窯跡の後背地を構成する岩石にK（Rb）が比較的多いと、その窯跡出土須恵器のK（Rb）量も比較的多く、逆に、母岩中のK（Rb）が比較的少ないと、窯跡出土須恵器のK（Rb）量も比較的少ないことが分かった。Ca（Sr）についても同様である。そして、花崗岩類中ではKとCaの間には明確な逆相関の関係にあることも分かった。この関係は粘土（土器）中ではやや崩れる。その原因はKに比較してCaの風化が速いためである。これらの実験データから、須恵器の素材となった粘土は窯跡の後背地を構成する岩石が風化して生成した残留粘土であると考えられた。このことは窯跡周辺に産する在地産の粘土が須恵器の素材となったことを示唆しており、古代、中世を通して、素材粘土を求めて窯を設置したことを物語る。

こうした研究過程から、窯跡出土須恵器の地域差は通常、K-Ca、Rb-Sr分布図上で表示されることになった。両分布図では地域差を定性的にしか表さないが、それでも、粘土にみられる微妙な地域差を目に見えるかたちで表示できる点できわめて重要な役割を果たしてきた。さらに、素材粘土には天然物特有のばらつきがある。1基の窯跡から出土した破片を多数分析すると、分析装置自身による変動以上に大きくばらつく。このことは自然界に存在する粘土は同じ母岩に由来するとはいえ、決して均質なものではなく、不均質であることを示す。したがって、1基の窯跡から出土する須恵器（中世陶器）は通常、両分布図上では星雲状に広がりをもったかたちで表示される。このような広がりのある二つの窯間の相互識別には2群間判別分析法が適用できる。さらに、5%危険率をかけたホテリングのT²検定に合格する条件を入れると、産地である窯跡に帰属するための必要条件が求められ、それが須恵器、中世陶器の産地推定法となって定着している。現在は単に産地を推定するだけではなく、「須恵器、中世陶器の生産と供給の再現」というテーマで研究が推進されている。

中世陶器の場合、肉眼観察で常滑陶器、越前陶器、備前陶器などと推定できる場合が多く、これまでのところ、須恵器のように、本格的に2群間判別分析は適用されていない。本報告でも、肉眼観察で常滑陶器、白石陶器、飯坂陶器と推定された陶器片について、分布図上で常滑窯群、一本杉窯群の陶器の化学特性に対応させてみた。しかし、今後、研究の展開如何によっては、2群間判別分析法が適用されることになるだろう。

2）分析法

陶器片資料は表面を研磨したのち、タングステンカーバイド製乳鉢の中で、100メッシュ以下に粉砕された。粉末試料は塩化ビニル製リングを枠にして高圧をかけてプレスし、内径20mm、厚さ5mmの一定形状の錠剤試料を作成し、蛍光X線分析用の試料とした。

使用した分析装置は理学電機製RIX2100（波長分散型）で、完全自動式分析装置である。使用X線管球はRh（出力3.0kW）である。使用条件は50kV、50mAである。この条件でRb、Srの蛍光X線は十分励起できる。 筆者は通常、Na、K、Ca、Fe、Rb、Srの6元素を測定している。これらの元素の蛍光X線強度（ピーク）は比較的高く、短時間の測定で十分な蛍光X線強度が得られるからである。小さなピークはカウント数をかせぐため長時間の測定が必要であり、ルーチン分析には不適当である。また、これらの元素を同時に測定するためには、各スペクトル線の分解能からみて、1枚の分光結晶では困難である。筆者が使用する装置ではTAP（Na用）、Ge（K、Ca、Fe用）、LiF（Rb、Sr用）の3枚の分光結晶が装填されており、かつ、軽元素の蛍光X線の測定にはガスフロー比例計数管を、また、中並元素の蛍光X線の検出にはシンチレーションカウンターを使用している。これらの複数の分光結晶と検出器を手動で交換するのは無理であり、コンピュータの制御によって自動的に交換される。試料の交換、データの打ち出しも自動的に行われる。このような装置でないと、胎土分析の研究（土器を通して過去を再現するための方法論の開発研究）のように、大量の上器小破片試料の分析を必要とする研究では不適当である、このことは意外に知られていない事実である。現在、このタイプの装置は大阪大谷大学と鹿児島国際大学にしか設置されていない。

岩石学研究で従来使用されてきた分析値の表示法は検量線法により、酸化物形で%表示する表示法である。しかし、土器の地域差に関する研究では必ずしも主成分元素を酸化物形で%表示する必要性はない。むしろ、大量の分析データを処理する上には、同じ日に測定された岩石標準試料、JG-1の各元素の蛍光X線強度を使って標準化した値（JG-1による標準化値）で表示するほうがデータの取り扱いが簡単であり、グラフ化する場合にも便利である。長年にわたるこれまでの研究ではこの表示法で成功している。以下のデータ解析でもすべて、この考え方で分析値を表示した。

3）分析結果

分析データは表1にまとめてある。全分析値はJG-1による標準化値である。このデータに基ずいて、図を作成した。

はじめに、母集団となる常滑窯群と一本杉窯群（宮城県白石市）の両分布図を示す。両者とも、幾つもの窯跡から採取された試料片の分析結果である。まず、図1には常滑窯群の中世陶器（かめ、壺）の両分布図を示す。焙どの試料を包含するようにして定性的な常滑領域を描いてある。この領域は定性的にしか領域を示さないが、それでも、地域差を比較するIこには有効である。両分布図で地域差があることが確認されてはじめて、つぎの作業へと進む。分析値の数値だけでは地域差の具体的な影像は描き難く、研究の進展は困難である。常滑製品のK量は全国的に見て中程度の含有量であるが、Rb量はやや多い。これに対して、Ca、Sr量は比較的少ない。この特徴は東海から近畿地方にかけての地域の須恵器、中世陶器のもつ化学特性である。比較のために一本杉領域を示してあるが、図2に描いてある白石領域を図1に転写したものである。

図2には一本杉窯群の中世陶器の両分布図を示してある。K、Rb量が比較的少なく、逆に、Ca、Sr量が比較的多い。これは東北地方太平洋側の地域の窯跡出土須恵器、中世陶器のもつ特徴である。図1と比較するとよくわかる。そして、いずれの窯群もある程度の広がりをもつが、それでも、まとまって分布していることもよく分かる。この結果、両分布図で常滑窯群の製品と一本杉窯群の製品が十分区別できることが分かる。

図3には肉眼観察で常滑産の可能性があると推定された陶器資料の両分布図である。殆どの資料は常滑領域に分布していることが分かる。渥美産、産地不明とされた資料はK-Ca分布図で常滑領域を少しずれる。渥美窯群産のかめ、壷の分析データは筆者の手元にはないが、須恵器では渥美製品は常滑製品に比べてCa、Srがやや多い傾向を示すので、このデータがそのまま活用できるとすれば、肉眼観察どおり、渥美産の可能性は十分ある。

図4には若宮前遺跡および、その周辺の遺跡出土中世陶器のうち、肉眼観察で白石製品、珠洲系陶器と推定された中世陶器の両分布図を示す。No.2を除いて、白石製品と推定された4点の資料は両分布図で白石領域に分布しており、白石製品である可能性が高いことを示している。会津若松市の大戸窯群を除いて、地元、宮城県、福島県には白石市の一本杉窯群ほど大きな中世陶器の窯跡群はない。この点で今回の分析データ通り、白石製品である可能性は大きい。しかし、肉眼観察で白石製品と推定された資料のうち、No.2は白石製品ではなく、常滑製品の可能性が高い。珠洲系陶器の可能性があると推定された4点の資料は両分布図ではよくまとまって分布しており、同じ窯群の製品であることはほぼ確実である。しかし、両分布図で珠洲系陶器の中でも、富山県八尾市にある京ヶ峯窯の珠洲系陶器や新潟県笹神丘陵にある北沢窯、秋田県二ツ井町のエヒバチ長根窯の珠洲系陶器とは対応しない。ただ、秋田県の大畑窯の製品の化学特性とは一致するわけではないが、類似する。もし、肉眼観察通り珠洲系陶器であるとすれば、大畑窯の製品である可能性を考えなければならない。しかし、珠洲系陶器の窯はいずれも珠洲陶器の窯群ほど大規模な窯群ではなく、せいぜい数基程度以下の窯群では、それほど大きな生産力を持っていなかったと推察される。生産力の小さい窯の製品が遠くの消費地遺跡へ供給されるとすると、その製品にはそれ相当の価値があったか、流通経路に特異性があったものと思われる。この点についてはこれまでのところ、殆ど研究されていないのではないだろうか？　今後、これらの珠洲系陶器の生産と供給という視点から、まず、窯の近辺の消費地遺跡からこれらの珠洲系陶器の生産と供給の関係を再現する、本格的な調査研究をしなければならないであろう。もちろん、宮城県石巻市に1基しかない水沼窯の中世陶器の生産と供給問題についても同様である。

これまで、大規模窯群である六古窯の製品の伝播については肉眼観察から、広く伝播しているといわれてきた。しかし、六古窯の製品といえども、今後、その生産と供給の関係を詳細に再現しようとすると、本格的に胎土分析の方法を導入しなければならないであろう。そのデータが大量に集積されたとき、はじめて、そのデータから、これらの中世陶器の生産と供給問題を歴史研究のテーマとして取り上げることが出来るであろう。

過去を再現することは非常に難しいことである。如何にきちんとした方法論を立てて過去を再現するかが問題である。自然科学の方法といえども、過去を実証することは簡単には出来ないのである。この点で誤解されていることが多いのではないかと思う。過去を再現するための方法論を構築するために自然科学の方法が取り入れられているだけである。胎土分析をしただけでは過去を再現することは不可能に近い。

ここで、他の元素についても、常滑群、白石群への対応を試みた。図5にはFe因子を比較してある。一般に、須恵器のように硬いやきものの素材粘土は流紋岩、花崗岩などのFeの含有量が少ない岩石に由来する粘土が使われている場合が多く、そのため、Fe因子は有効に地域差を表さない場合が多い。しかし、図5をみると、Fe量の少ない常滑陶器に比べて、白石陶器には明らかにFe量は多いことが分かる。Fe因子でも両者は十分区別できることを示している。この結果を活用すると、若宮前遺跡および鴻ノ巣遺跡から出土した中世陶器のうち、肉眼観察で常滑製品と推定された資料はいずれも、Fe因子でも常滑群に対応していることが分かる。さらに、K-Ca、Rb-Sr分布図で白石製品と推定された4点の資料はFe因子でも明らかに白石群に対応することが分かる。しかし、No.2のみはFe因子でも白石

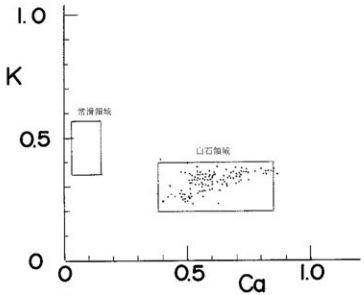
群には対応せず、常滑群に対応することが分かる。一方、珠洲系陶器の可能性があるとされる資料はFe因子では、常滑群にも、白石群にも対応しないことが分かる。しかし、4点の資料はFe因子でもよくまとまっており、長石系因子と同様、Fe因子でも同じ生産地の製品であることを示している。常滑製品と白石製品の中間程度のFe含有量である。

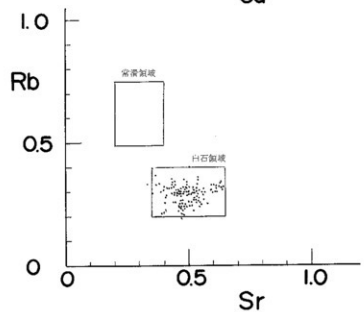
図6にはNa因子を比較してある。Naは岩石に含まれている主成分鉱物の中で、最も風化が速く、したがって、母岩に比べて、粘土中の含有量の減少が最も目立つ元素である。したがって、一般的には、地域差は見難い元素である。しかし、図6を見ると、常滑群と白石群にはNa因子でも違いがあることが分かる。明らかに、常滑製品にはNa量は少ない。これに対して、白石製品には明らかにNa量は多いことが分かる。両者はNa因子でも相互識別できることは明らかである。両母集団に対して、遺跡出土中世陶器の分析データを対比してみると、まず、白石製品と推定された4点の資料はNa因子でも、白石群によく対応することが分かる。ただ、No.2のみは白石群には対応せず、他の因子同様、常滑群にはよく対応する。また、常滑製品と推定されていた6点の資料はNa因子でも、常滑群によく対応する。渥美群と推定されていた資料はNa因子でも常滑群に対応する。珠洲系陶器の可能性があると推定された試料にはNaの含有量は少なく、常滑製品並である。この点でも珠洲系の大畑製品に類似する。しかし、白石製品には対応しない。このように、珠洲系陶器と白石製品に見られる化学特性の違いは粘土の母岩に含まれていた長石類、鉄化合物の含有量の違いに起因するものと推察される。白石製品の素材粘土は蔵王の火山活動に由来する火山岩が母岩であると推察される。この母岩中には雲母、角閃石、輝石、かんらん石などの鉄化合物が多く含まれていたと推察される。ただ、須恵器や中世陶器のように、1000℃を越える高温で焼成すると、粘土中に含まれていた鉱物の形は破壊され、製品である陶器の胎土中には観察されない場合が多い。ただし、元素Fe自身は蒸発して失われることはないので、これが白石製品にはFe量が多い理由であると考えている。珠洲系陶器の素材粘土は白石製品の素材粘土とは別岩石に由来するものと推察される。

以上の胎土分析の結果は表1の最右欄に記載してある。No.2を除いて、肉眼観察の結果とほぼ一致していることが分かる。大規模窯群である常滑窯群の製品が遠く離れた宮城県内の消費地遺跡から出土することは十分理解できる。また、逆に、白石製品が検出されたことについては、一本杉窯群以外に宮城県内に中世陶器の窯群がない限り、白石製品であるという推定は十分理解できる。ただ、日本海側にある珠洲系陶器の窯の製品と推定されたものについては疑問がある。生産力の小さい窯の製品が遠くへ伝播しているということになると、よほど、その製品に何らかの特異性があったと推察される。そのことについては今後、研究することが必要である。

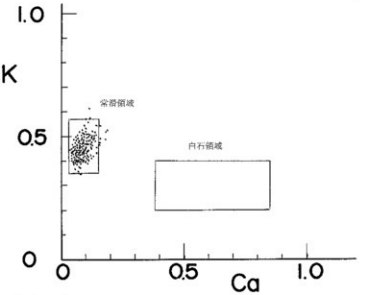
須恵器の胎土研究ではかなり詳細なデータが出されているが、中世陶器は肉眼観察でその生産地が推定できるという考えから、これまであまり胎土分析はなされてこなかった。中世六古窯以外にも珠洲陶器のように多数の窯を擁する窯群があり、今後、各地で大量に生産された中世陶器の伝播を通して、中世社会の一端を再現する歴史研究を展開するためには、大量の胎土分析のデータを集積するという根気強い研究が必要である。それは21世紀の若い研究者たちの研究課題であり、それが成就されたとき、土器の考古学は大きな変貌を遂げるであろう。筆者自身もそれに向け努力するつもりである。

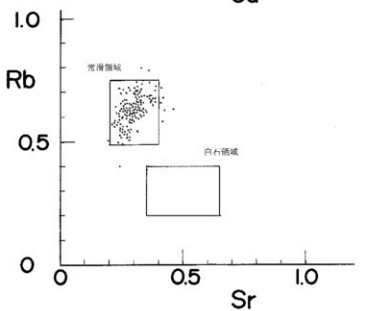
一本杉窯群（白石市）出土中世陶器の両分布図



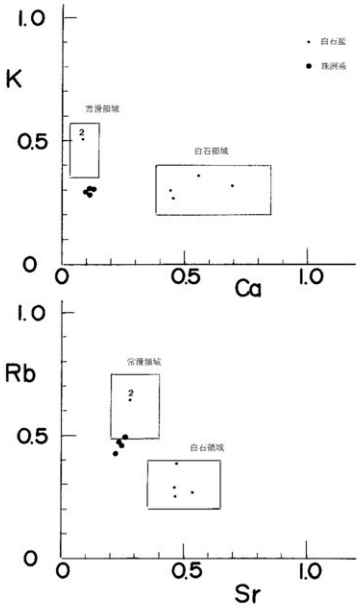


常滑窯群出土中世陶器（壺、かめ類）の両分布図

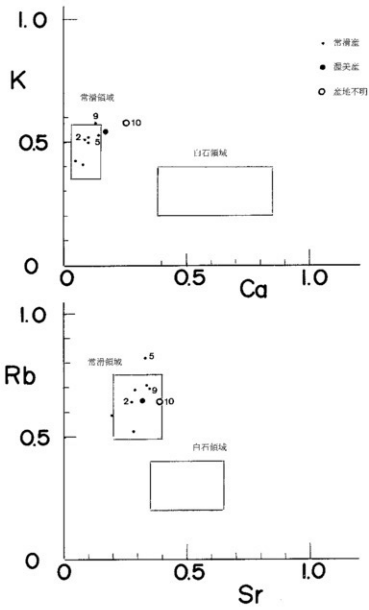




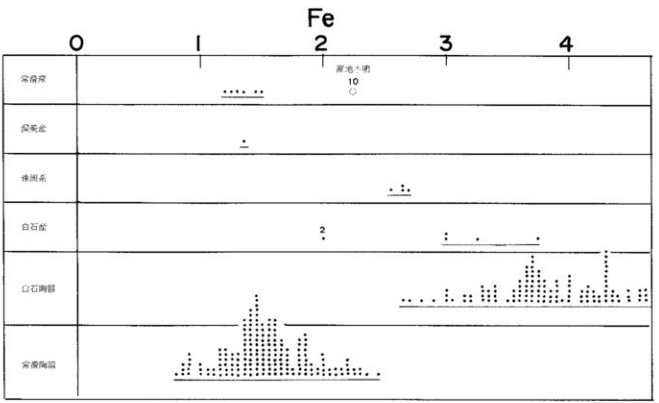
白石産、珠洲系と推定された中世陶器の両分布図



常滑産、渥美産と推定された中世陶器の両分布図



Fe因子の比較



Na因子の比較

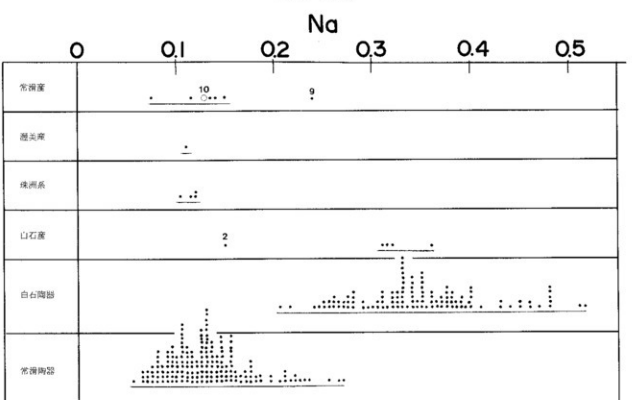


表１　若宮前遺跡および周辺遺跡出土中世陶器の分析データ

資料番号	三辻研No.	器種	図・番号	年代	推定産地	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	胎土分析による推定
1	21−961	壺	28図1	中世	常滑か	0.424	0.045	1.33	0.593	0.193	0.075	常滑
2	962	甕	28図2	13c後半～14c前半	在地	0.512	0.081	2.01	0.643	0.276	0.150	常滑
3	963	甕？	28図3	中世	常滑	0.499	0.095	1.52	0.691	0.279	0.135	常滑
4	964	壺？	28図4	12c中頃～後半	常滑	0.519	0.097	1.35	0.712	0.335	0.139	常滑
5	965	壺or甕	28図5	12c前半	常滑	0.528	0.137	1.23	0.823	0.331	0.133	常滑
6	966	壺	28図6	12c	渥美	0.543	0.168	1.34	0.643	0.317	0.108	渥美
7	967	甕？	29図1	12c	常滑か	0.405	0.077	1.24	0.518	0.282	0.115	常滑
8	968	擂鉢	29図2	13c後半～14c前半	白石窯	0.359	0.544	3.28	0.385	0.474	0.361	白石
9	969	壺	18図8	13c後半	常滑	0.582	0.126	1.44	0.700	0.345	0.239	常滑
10	970	壺or火鉢	29図3	近世	？	0.575	0.252	2.27	0.637	0.385	0.130	渥美？
11	971	甕	19図1	13c後半～14c前半	在地	0.267	0.451	3.02	0.253	0.458	0.312	白石
12	972	甕or壺	19図2	12c後半～13c前半	珠洲系	0.283	0.113	2.63	0.420	0.216	0.116	不明
13	973	甕or壺	19図3	12c後半～13c前半	珠洲系	0.303	0.125	2.68	0.464	0.245	0.118	不明
14	974	甕	19図4	12c後半～13c前半	珠洲系	0.300	0.117	2.65	0.468	0.243	0.120	不明
15	975	甕or壺	19図5	12c後半～13c前半	珠洲系	0.294	0.106	2.54	0.496	0.263	0.104	不明
16	976	鉢orこね鉢	29図4	13c後半～14c前半	白石窯	0.327	0.690	3.77	0.271	0.533	0.316	白石
17	977	甕	12図6	13c後半～14c前半	在地	0.298	0.438	3.03	0.291	0.458	0.319	白石

第6章　まとめ

調査の結果、出土遺物などから縄文時代・古墳時代・中世・近世・近代の各時代にわたる人々の活動を確認した。縄文時代の出土遺物は多条の縄文土器片であり、早期末葉に位置づけられる。古墳時代の遺物は土師器片などが出土しており、年代が推定できるものは前期の塩釜式である。遺構と遺物が良好に確認できた時期は、中・近世である。ここでは、主に中・近世の若宮前遺跡について調査区ごとに述べることとする。

若宮前遺跡周辺の歴史的・地理的環境

鎌倉・室町時代の屋敷跡群の発見された新田遺跡（多賀城市）・洞ノ口遺跡（仙台市）が立地する自然堤防を西に向かうと、七北田川と富谷丘陵が最も近接する部分に辿り着く。若宮前遺跡はこの辺りに位置し、東光寺城とともに岩切城への登り口を両側から押さえる役割を果たしたとされる。富谷丘陵の先端部であるこの周辺は、これまでの調査により、中世には瓦葺き寺院・石窟仏・板碑群などから成る霊場としての存在が明らかにされてきた。

独立丘陵突端部の平場と掘立柱建物（A区）

小独立丘陵上の南側突端部の平場には、大溝に画された掘立柱建物が建てられていた。また、この大溝から続く階段状の出入り口痕などが見つかっている。これらは城館もしくは屋敷の一部が遺存した姿と考えられる。年代については、柱穴の検出状況や柱穴内からの出土陶器から中世の建物と推定される。

なお、この平場については、1962・1964年の地図やその基になった航空写真を確認すると、西側に倍以上の広さがあったことがわかる。このことから、掘立柱建物は、当初の想定よりも規模が大きく西側に梁行が増す可能性がある。

塚状遺構（B区）

丘陵突端の平場の北方にある塚状遺構は、頂部に長方形に近い平坦面があり、突端の平場よりわずかに高く、南方の平野を一望できる。塚状遺構は、丘陵の頂部を削平し盛土を行い、斜面を成形して構築されていた。また、平坦面のほぼ中央で発見された土坑は、土師質土器の皿と土師器片が出土したが、堆積土などから判断すると、後世に攪乱を受け本来の姿を失ってしまったようである。

出土遺物について注目すべき点は、東日本各地で焼かれた中世陶器が出土していることである。これらの陶器の年代は、12世紀後半から13世紀後半と幅がある。出土状況は、塚状遺構の斜面から中世陶器と近世陶磁器などが、混在して出土している。

中世遺物の年代幅は当初の塚状遺構を削平し平場化した段階があった可能性があること、また、中・近世遺物の出土状況は近世の削平により中世の遺構が破壊された可能性があることを示している。また、塚状遺構の北側斜面には参道状の造り出しが見られ、頂部の平坦面の存在と遺物の内容から近世には小祠が祀られていたのかもしれない。

通路状遺構と墓坑群（C区）

調査区の北部で見つかった浅い溝跡は、通路としての性格が窺え、この小独立丘陵上の南方へ、つまり塚状遺構へ向かっている。また、発見された土坑群は、出土遺物などから近世の土坑墓と判断でき、18世紀後半代のものがある。現在宅地化されている北東部には、墓域として利用されたとの伝承があることからその一部と考えられる。

中世・近世における若宮前遺跡付近の変遷

以上から中世・近世における若宮前遺跡付近の変遷を概観してみたい。中世初期においては、12世紀後半から13世紀前半頃に墳墓・経塚もしくはなんらかの信仰の場が存在していた。このことは、近世には、志波彦神社（延喜式内社）が北東方向数十メートルの同一丘陵上にあり、中世にも存在したとすれば、この場の聖地性を窺うことができる。次に、中世後半段階になると、塚状遺構は頂部が半場化され、この時点では丘陵突端部の居館もしくは城

館と一体的な機能を有していた可能性がある。この付近に「馬場」や「物見台」についての伝承があることからも肯ける。そして、近世には恐らくここに小祠が祀られ、この丘陵の北側は墓域としての土地利用が行われた。

なお、若宮前遺跡の南側に鎮座する八坂神社は寛永年中（1624－44）に西方の大土山から現在地に移ったという伝承があり、志波彦（冠川）神社は明治7年（1874）にこの地から塩竈神社境内地に、移転され今日に至っている。

〔参考・引用文献〕

1　小泉弘（1987）「江戸の考古学」考古学ライブラリー48
2　仙台市教育委員会（1975）「入山館予備調査報告（略報）」
3　仙台市教育委員会（1976）「仙台市岩切　若宮前遺跡　発掘調査説明資料」
4　仙台市教育委員会（1983）「仙台市文化財分布地図」『仙台市文化財調査報告書』51
5　仙台市教育委員会（1985）「若林城跡」『仙台市文化財調査報告書』83
6　仙台市教育委員会（1988）「東光寺遺跡」第1・2次発掘調査報告書『仙台市文化財調査報告書』112
7　仙台市教育委員会（1996）「仙台市宮城野区・若林区文化財分布地図」
8　仙台市教育委員会（1996）「笹森城跡」『仙台市文化財調査報告書』209
9　仙台市教育委員会（2000）「仙台市王ノ鬼遺跡」都市計画道路「川内・卸生線」関連遺跡発掘調査報告書『仙台市文化財調査報告書』249
10　仙台市教育委員会（2004）「湯ノ巣遺跡」『仙台市文化財調査報告書』280
11　仙台市教育委員会（2005）「洞ノ口遺跡」『仙台市文化財調査報告書』281
12　仙台市教育委員会（2006）「史跡岩切城跡と周辺の遺跡」『仙台市文化財パンフレット』53
13　仙台市史編さん委員会（1994）「自然」『仙台市史特別編』1
14　仙台市史編さん委員会（1995）「考古資料」『仙台市史特別編』2
15　仙台市史編さん委員会（1998）「板碑」『仙台市史特別編』5
16　仙台市史編さん委員会（2006）「城館」『仙台市史特別編』7
17　仙台市史編さん委員会（2000）「古代・中世」『仙台市史通史編』2
18　多賀城市教育委員会（1986）「山王遺跡」『多賀城市文化財調査報告書』9　昭和60年度発掘調査報告書
19　多賀城市教育委員会（1995）「野出館跡」『多賀城市文化財調査報告書』40　第1次発掘調査報告書
20　多賀城市教育委員会（2006）「山王遺跡」『多賀城市文化財調査報告書』86　第58次調査報告書
21　多賀城市教育委員会（2006）「山王遺跡」『多賀城市文化財調査報告書』81　第51・54・57次調査報告書
22　多賀城市埋蔵文化財調査センター（1989）「新出遺跡」『多賀城市文化財調査報告書』18
23　多賀城市埋蔵文化財調査センター（1990）「新出遺跡」『多賀城市文化財調査報告書』23　（第4・11次調査報告）
24　多賀城市埋蔵文化財調査センター（1991）「山王遺跡」『多賀城市文化財調査報告書』27　第10次発掘調査概報
25　多賀城市埋蔵文化財調査センター（1992）「山王遺跡ほか」『多賀城市文化財調査報告書』29
26　田中則和（1992）「丘の上の世界」『よみがえる中世7－みちのくの都　多賀城・松島』

27　田中則和（2005）　「東光寺遺跡と青葉山」『東北中世考古学会第11回研究大会（宮城大会）資料集』
28　田中則和（2006）　「多賀国府の変容」『鎌倉時代の考古学』
29　宮城県教育委員会（1996）　「山王遺跡、」『宮城県文化財調査報告書』171
30　宮城県教育委員会（1996）　「一本杉窯跡群」『宮城県文化財調査報告書』172
31　宮城県教育委員会（1997）　「山王遺跡・　」『宮城県文化財調査報告書』174
32　宮城県教育委員会（1998）　「宮城県遺跡地図」『宮城県文化財調査報告書』176

写　真　図　版

A区　大溝及び掘立柱建物跡検出状況

B区　塚状遺構検出状況

図版1　A区・B区遺構検出状況

Ｂ区塚状遺構

Ｂ区SK1土坑検出状況

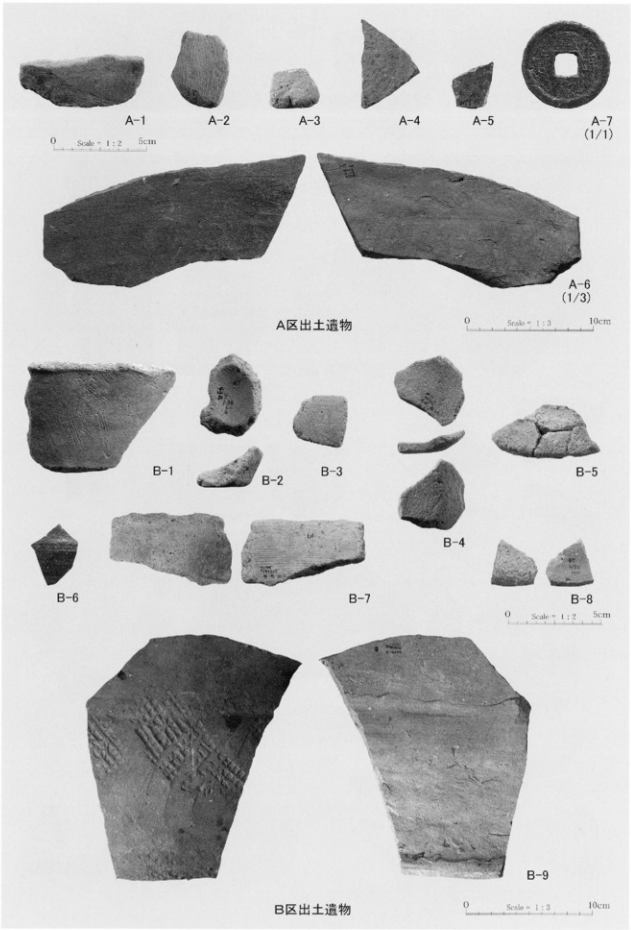
Ｂ区SK1土坑調査状況

Ｂ区SK1土坑完掘状況

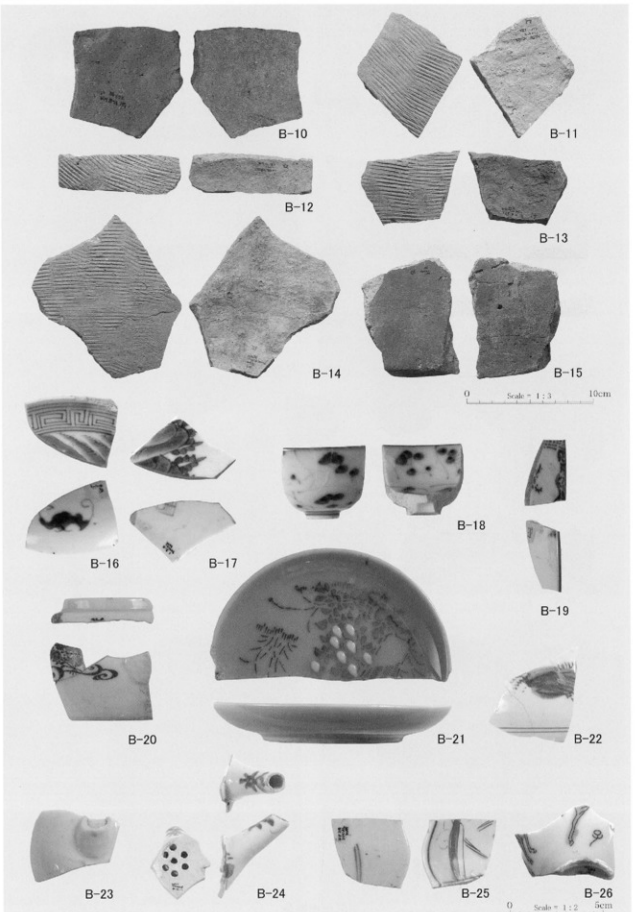
Ｂ区遠景（Ｃ区からＢ区を望む）

Ｃ区遠景（Ｂ区からＣ区を望む）

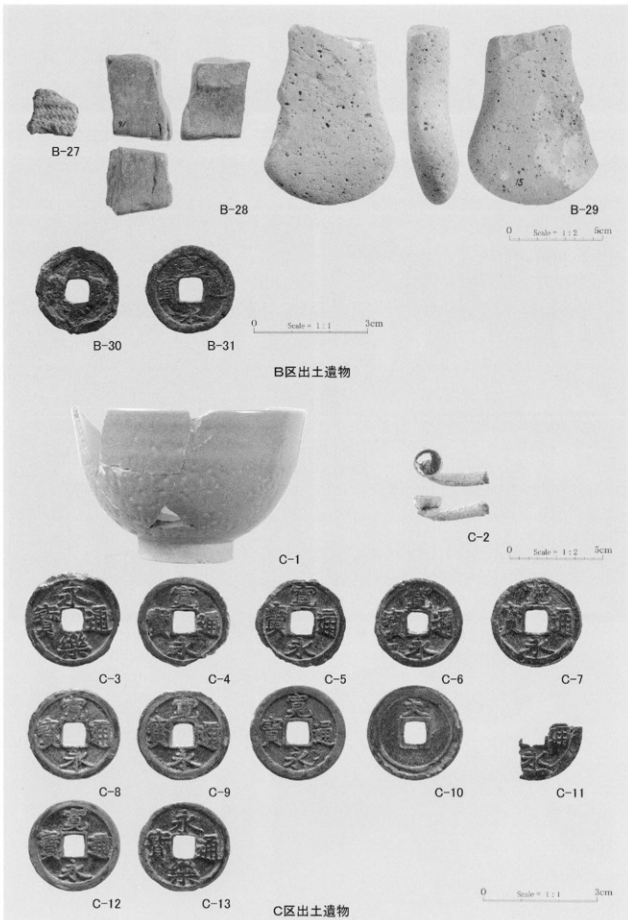
図版２　Ｂ区・Ｃ区遺構検出状況ほか


A-1
A-2
A-3
A-4
A-5
A-7
(1/1)
0 Scale = 1 : 2 5cm
A-6
(1/3)
A区出土遺物
0 Scale = 1 : 3 10cm
B-1
B-2
B-3
B-4
B-5
B-6
B-7
B-8
0 Scale = 1 : 2 5cm
B-9
B区出土遺物
0 Scale = 1 : 3 10cm

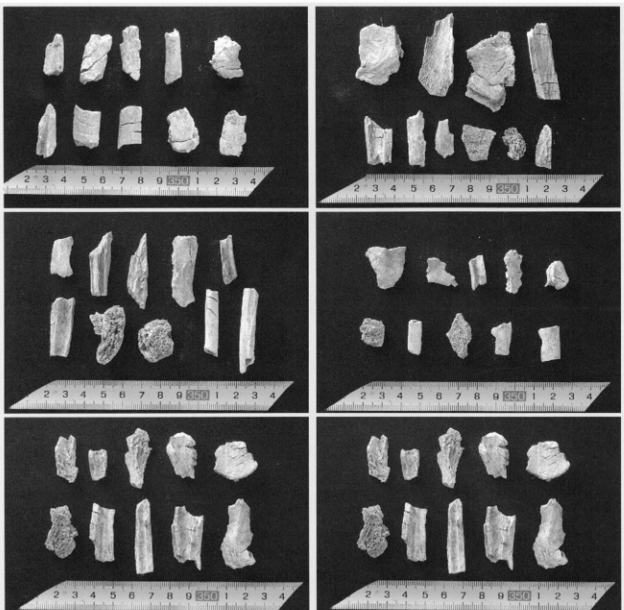
図版3　A・B区出土遺物


B-10
B-11
B-12
B-13
B-14
B-15
0 Scale = 1:3 10cm
B-16
B-17
B-18
B-19
B-20
B-21
B-22
B-23
B-24
B-25
B-26
0 Scale = 1:2 5cm

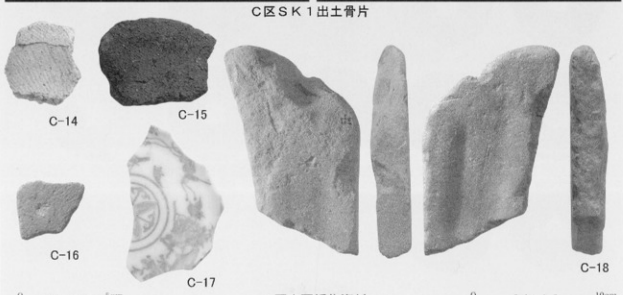
図版4　B区出土遺物


B-27
B-28
B-29
0 Scale = 1:2 5cm
B-30
B-31
0 Scale = 1:1 3cm
B区出土遺物
C-1
C-2
0 Scale = 1:2 5cm
C-3
C-4
C-5
C-6
C-7
C-8
C-9
C-10
C-11
C-12
C-13
0 Scale = 1:1 3cm
C区出土遺物

図版5　B・C区出土遺物

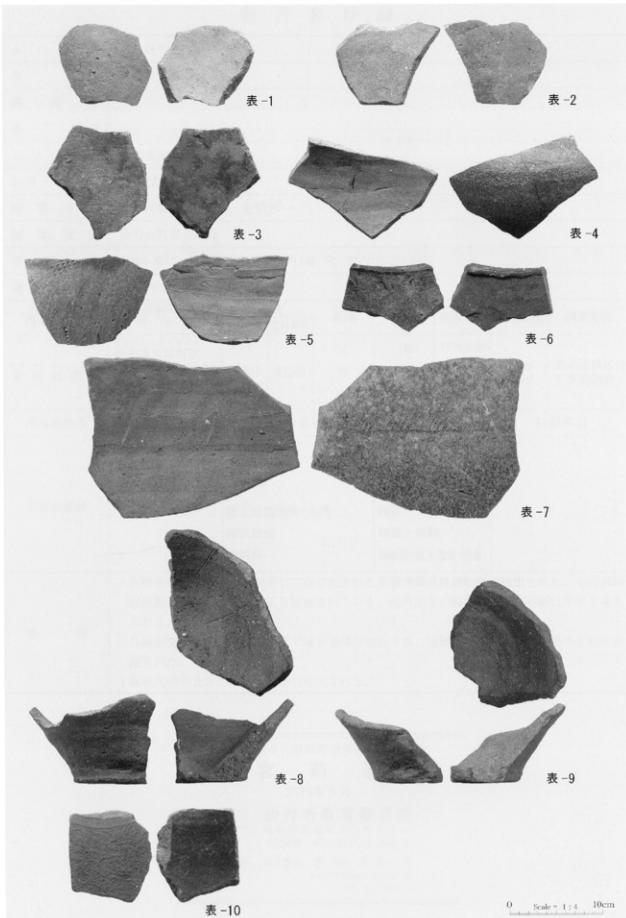


C区ＳＫ１出土骨片



C区表面採集資料

図版６　Ｃ区出土遺物



図版7　鴻ノ巣遺跡の表面採集遺物

報告書抄録

ふりがな	わかみやまえいせき
書名	若宮前遺跡
副書名	−
巻次	−
シリーズ名	仙台市文化財報告書
シリーズ番号	第370集
編著者名	田中則和　原河英二　佐伯修一
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8671　仙台市青葉区二日町1番1号　TEL022-214-8894
発行年月日	2010年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
わかみやまえいせき 若宮前遺跡	せんだいしみやぎのく 仙台市宮城野区 いわまりおわたみやまえ 岩切字若宮前 ほか 11他	04100	01248	38° 30′ 54″	140° 91′ 61″	1975.9.16 ~26 1975.12.1 ~28	297㎡ 480㎡	宅地造成に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
若宮前遺跡	散布地	縄文前期		縄文土器	
	〃	古墳前期		土師器	
	〃	平安		土師器・須恵器	
		中世	掘立柱建物跡・大溝	陶器	
		〃	塚状遺構	陶器・宋銭	
		近世	墓坑群	陶磁器・寛永通宝・煙管	

要約

・丘陵部突端部の尾根を削平して造りだされた平場で掘立柱建物跡が検出された。その北側は尾根に直行した大溝により区画されている。柱穴出土の陶器から所属時期は中世と考えられる。

・丘陵部突端部の調査区最高所で塚状遺構が検出され、頂部平坦面から中世以降の土坑が確認された。

・塚状遺構の北方に、近世墓群が発見された。

仙台市文化財調査報告書第370集

若宮前遺跡

2010年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区二日町1−1
文化財課　TEL 022（714）8893〜4

印刷　株式会社　建設プレス
仙台市青葉区新立三丁目2−10
TEL 022（302）0177